

文部科学省 大学教育再生加速プログラム
テーマⅢ（高大接続）



大学教育再生加速プログラム

日英中トライリンガル育成のための高大接続

事業報告書

2016（平成28年度）

文部科学省 大学教育再生加速プログラム
テーマⅢ（高大接続）



大学教育再生加速プログラム

日英中トライリンガル育成のための高大接続

事業報告書

2016（平成28年度）

杏林大学 事業報告書

目次

I. ごあいさつ

大学教育再生加速プログラム：高大接続 学長 跡見 裕	1
アドバンスト・プレイスメントで本格的な高大接続を 高大接続推進室長 稲垣 大輔	2

II. 事業概要・計画

..... 3

III. 事業実績と成果の概要

大学教育再生加速プログラム テーマⅢ：高大接続 「日英中トライリンガル育成のための高大接続」 平成 28 年度実績概要	7
---	---

IV. 事業実績の具体的内容

〈運営〉

1. 事業体制の強化	17
------------------	----

〈高大接続〉

2. 杏林 AP ラウンドテーブルの開催	19
3. 連携協定書の調印	22
4. 高校と大学をつなぐ FD/SD の開催	24
5. 連携高等学校との意見交換	25
6. アドバンスト・プレイスメント・ラウンド テーブルの開催	31

〈行事／教育〉

7. ライティングセンターの活動実績と成果 … 2016-2017 Writing Center Report	33
--	----

8. アドバンスト・プレイスメントの実施準備	37
---------------------------------	----

9. 大学教養レベル・グローバル関連科目 夏季集中講座	38
--------------------------------------	----

10. 大学教養レベル・グローバル関連科目・ COC 関連科目の開放	40
---	----

11. 日英中トライリンガルキャンプの実施 …	41
-------------------------	----

12. 英語キャンプの実施	43
---------------------	----

13. プレゼンテーションコンテストの実施 …	45
-------------------------	----

14. グローバル AP 「同時通訳ブース見学会」 の実施	47
--	----

15. グローバル AP 「ライティングセミナー」 の実施	48
--	----

16. グローバル AP 「エンパワメントセミナー」 の実施	49
---	----

17. IELTS 対策講座と試験を高校生にも開放	50
------------------------------------	----

18. ルーブリックの改良と入学試験への導入準備	51
-----------------------------------	----

〈波及効果〉

19. 高等学校での講演	55
--------------------	----

20. 聖徳学園高校生への医学部での「環境と 健康について」の実習開催	57
--	----

21. 順天高等学校生徒への保健学部での DNA 関連技術の演習開催	58
---	----

22. 聖徳学園中高生のいじめ防止活動に保健 学部の亀崎教授が参加	59
23. 青梅総合高等学校生徒にインターンシップ を提供	60
24. 三鷹中等教育学校生徒が職場見学	61
25. 三鷹中等教育学校生徒が職場体験	62
26. 武蔵村山高等学校生徒が戴帽式を見学 ...	63
〈広報活動〉	
27. マスコミ取材	64
28. 平成 27 年度事業報告書の作成と配布 ...	65
〈学内会議開催日程一覧〉	
29. 杏林 AP 推進委員会	66
30. 高大接続推進委員会	68

V. 事業の評価：平成 27 年度事業を対象に

31. 第三者評価委員会の開催と評価結果	71
----------------------------	----

VI. 事業推進組織 委員一覧

.....	75
-------	----

I. ごあいさつ

大学教育再生加速プログラム： 高大接続

学長 跡見 裕



大学教育の質的変換が求められている中で、杏林大学は様々な試みをしています。特に文部科学省の平成 26 年度「大学教育再生加速プログラム：日英中トライリンガル育成のための高大接続」に採択されたことは、私どもの取り組みに質的な変化をもたらし、本学の教育改革をより幅を持たせるものとなりました。従来の大学教育改革は当然の事ながら大学側から見たものでしたが、高等学校との緊密な連携を図ることにより、高大接続課程の重要性を含め、高校側からの視点の意義を強く認識するものとなったと言えます。このことは、全学をあげて見直したディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシーにもよく反映されております。この 3 ポリシーの一体的な策定は大学教育の根幹をなすものであり、本学が入学してほしいと考える学生像を明確にし、それを高大接続という形で動かしていく方向性を示したと考えております。

杏林大学においては、平成 22 年度から実施された第 2 次中期計画において高大連携推進実行部会を作り高等学校との連携を深め、杏林大学の持つ教育・研究資源を高等学校に開放し、スプリングセミナー、インターンシップなどで高等学校と連携を深めてきました。

平成 24 年度には外国語学部を中心とする教育目標とその成果が評価をされ、文部科学省の「グローバル人材育成推進事業：現、経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援」事業に採択され教育のグローバル化が一層加速しました。平成 25 年度には同省の「地（知）の拠点整備事業」の採択を受け、今まで以上に地域社会への貢献を目指し、Moving Global, Staying Local のキャッチフレーズの下、足元の地域社会を支える人材からグローバルに活躍できる学生まで幅広い人材育成に務めています。

今進めている「日英中トライリンガル育成のための高大接続」は、そのような今までの積極的な取り組みを基盤にしています。杏林大学と高等学校、特に SGH（スーパーグローバルハイスクール）や SGH アソシエイト、そしてグローバル教育を目指す高等学校との意見交換と連携・接続を強化していきます。ルーブリック、ポートフォリオの作成も進んでおり、来年度からの入試に利用することを考えております。さらに高校生が大学の開講科目を履修し、大学入学後に大学の卒業に必要な単位として認定するアドバンスト・プレイズメント（AP）を開始しました。高校と単一の大学間での AP でなく、複数の大学での AP がより高校生にとって重要と考え、桜美林大学、共愛学園前橋国際大学とも単位互換協定を締結いたしました。高校生がしっかりと目的意識を持って大学に入学でき、入学後の学修がスムーズに行えるように教育目的や教育方法の開発としっかりと学修成果の評価を行える仕組みを、高等学校と共にさらに進めていきます。

今後の取り組みについて、関係者一同努力するつもりですので、なにとぞご指導のほどをよろしく願います。

アドバンスト・プレイスメントで 本格的な高大接続を

高大接続推進室長 稲垣 大輔



平成 26 年度大学教育再生加速プログラム（AP）テーマⅢ：高大接続として採択され、今年度で 4 年目に入る事業は、「日英中トライリンガル育成のための高大接続」です。本事業は、グローバル人材育成に積極的に取り組んでいる高等学校との高大連携・高大接続を主眼として、より効率的かつ効果的にグローバル人材育成を加速させることを目的としています。採択後、毎年計 3 回の日英中トライリンガルキャンプという宿泊型学修機会を提供し、留学経験者や海外からの留学生を中心とする本学学部生と国際志向の強い高校生の皆さんに、学年や学校の枠を超えて交流し、英語・中国語・日本語の重要性を実体験してもらいました。

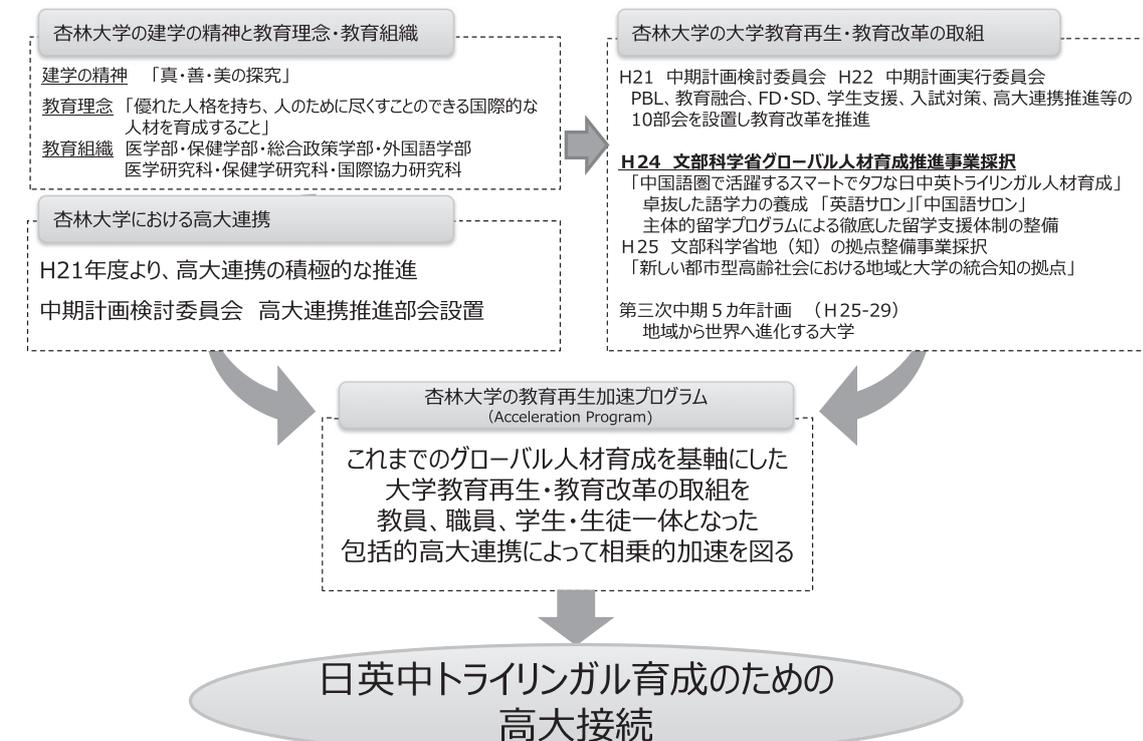
昨年 4 月に井の頭新キャンパスが開設され、本事業にも拍車がかかりました。交通・アクセスの地理的条件が格段に向上し、高大連携・高大接続の可能性も高まりました。昨年度は、夏季休業期間に 3 科目の高校生対象の大学教養レベル「グローバル関連科目」を開講し、大学祭時に高大接続した形での英語・中国語プレゼンテーションコンテストを実施しました。秋学期は本学外国語学部・総合政策学部の一部の授業科目を高校生に開放し、関東国際高校の 5 名の高校生が学期を通じて大学生に交じって授業を受講しました。新キャンパスに移設したライティングセンターでは、特任講師の指導のもと、学部 3・4 年生の上級生がピアチューターとして下級生や高校生の語学力向上のための学修支援に取り組んでいます。高校生対象のライティングセミナーも実施し、高校生の自己表現能力の向上に一役買っています。一方、教職員も、グローバル人材育成に積極的に取り組んでいる高等学校関係者と、互いの教育目標や教育内容・方法についての相互理解を図るため、杏林 AP ラウンドテーブルと呼ぶ意見交換会を、昨年度も年間 3 回開催しました。

そしていよいよ本年度は、高校生が大学の開講科目を履修し、大学入学後に大学の卒業に必要な単位として認定するアドバンスト・プレイスメントを開始しました。昨年度中に学則・規程等の整備を終え、桜美林大学共愛学園前橋国際大学とも単位互換協定を締結し、今後もより多くの大学で高校時に杏林大学で修得した単位を認めてもらえるよう制度普及を図っていきます。平成 29 年度春学期は近隣の大成高校の 5 名の高校生が授業を履修し始めましたが、より多くの高校生の皆さんに、杏林大学のキャンパスで、大学での学びに接していただきたいと願っています。

本事業に対し、引続き皆様のご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

Ⅱ. 事業概要・計画

事業の概要



事業申請時点までの高大連携の実績

H21中期計画検討委員会 H22中期計画実施委員会 高大連携推進実行部会

- 八王子キャンパス周辺 116校に働きかけ→重点14校と教育交流・連携活動推進（八王子北高等学校、青梅総合高等学校、町田総合高等学校、啓明学園高等学校、三鷹高等学校、羽村高等学校など）

青梅総合高等学校・八王子北高等学校と「高大連携教育協定」締結

- 「大学体験プログラム」「高校生インターンシップ」「医学部体験講義・実習」などの高大連携教育機会の定期的実施
- 「スプリングセミナー」 H23、24、25年度と春季休業中に高校生に対して大学における教育機会を提供
- 「大学授業科目による高校側の単位認定」「マーケティング論」（総合政策学部）「ホスピタリティ実習」（外国語学部）
- 「中国語がつなぐ高大連携」 本学中国人留学生在が青梅総合高校にて中国語指導と交流

聖徳学園中学・高等学校とグローバル人材育成で「高大連携協定」締結

- 「大学の授業科目への特別聴講生徒受入れ」「大学の各種公開講座への聴講生受入れ」「大学教員による高校への出張講義」「教育についての情報交換及び交流」に関して連携
- H26年度 高大接続を図る「Link English」で本学教員が定期的に出張講義
- 教員人事交流：H26年9月より外国語学部英語学科卒業生が非常勤講師として採用

第4回杏林大学グローバルシンポジウム（H26年9月6日開催決定、杏林大学三鷹キャンパス大学院講堂）

- テーマ：「高大連携によるグローバル人材育成」
- 参加校：聖徳学園高等学校、順天高等学校（SGH指定校）

杏林大学グローバル人材育成の実績と高大接続

外国語学部を中心とした日英中3言語教育の実績

- 1988年 外国語学部（英米語学科・中国語学科・日本語学科）開設
- 2001年 外国語学科1学科制に
- 2006年 英語学科開設 3学科制開始と同時に中国語を学部必修科目に
- 2009年 国際協力研究科国際言語コミュニケーション専攻日中通訳・翻訳研究 コースの設置
- 2011年 中国語学科開設 現在の3学科体制（英語学科・中国語学科・観光交流文化学科）に

経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援（旧グローバル人材育成推進事業）

「中国語圏で活躍するスマートでタフな日英中トライリンガル人材育成」

- ・日英中3言語を必修とし達成目標を明示した語学教育
- ・卓抜した語学力の養成：英語サロン・中国語サロン
- ・徹底した留学支援、中国五大外語大学との協定締結
- ・中国語圏の歴史・政治・経済に関する学際的学び（総合政策学部）

	中国語学科	英語学科 観光交流文化学科
中国語	・HSK5級以上 （中国一流大学入学レベル） ・中国語検定2級以上	・HSK2級以上 （日常会話レベル） ・中国語検定4級以上
英語	・TOEIC500点以上 ・TOEFL iBT52点以上 ・IELTS4.5点以上	・TOEIC800点以上 ・TOEFL iBT80点以上 ・IELTS6点以上

杏林大学の教育再生加速プログラム（Acceleration Program）

中国語の必要性を高校生に普及

高大接続による日英中トライリンガル人材育成

高校→大学→大学院の一貫した高度な中国語教育

本事業の構想—1

基本認識

- ①中国は世界第2の超大国、日本と密接な関係、日中両国にさまざまな問題
→中国の文化・政治・経済理解の必要性、中国語学習の必要性
- ②中国語を第一言語として話す33カ国1,197百万人、英語を第一言語として話す99カ国335百万人(出典: Ethnologue) とコミュニケーションできる人材の有用性
- ③杏林大学が目指す社会機能：異なる言語・世代・立場を超えて建設的にコミュニケーションできる人材の育成

特色

グローバル人材育成という教育目標を掲げた高大接続

スーパーグローバルハイスクール(SGH)指定校、SGHアソシエイト、グローバル人材育成に積極的に取り組む高校との高大接続を図る

日英中トライリンガルの必要性を高校生・日本社会に広く普及し、高大一体となって効率的に日英中トライリンガル人材の育成を図る高大接続

杏林大学の中国語の教育資源を活用：中国語の必要性を広く高校生に普及するため、ピアサポーター（特に中国からの留学生）による教育機会の提供

高大7年間の接続された教育課程で、日本語に加えて2言語（英語・中国語）の「卓抜した語学力」の修得を図り、日英中トライリンガルを育成

高校・大学を接続した他国の歴史文化に興味を持つ人材の育成

高校で目指す到達レベル

HSK2級
TOEIC500

大学で目指す到達レベル

HSK5級
TOEIC800

本事業の構想-2

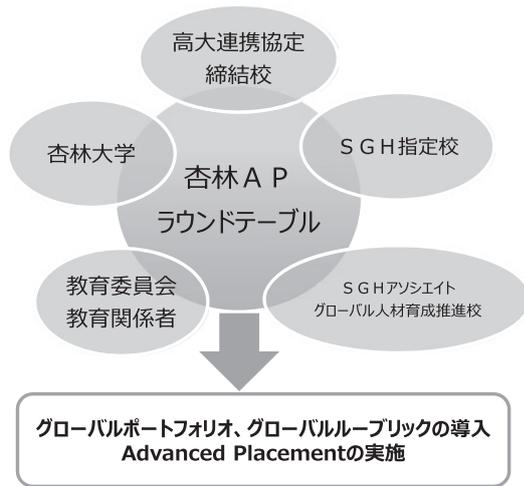
手段・方法

杏林A Pラウンドテーブル

杏林大学A P推進委員会と連携高校関係者、連携自治体（三鷹市・羽村市・八王子市）の教育委員会関係者が人材育成について意見交換する場

グローバルポートフォリオ、グローバルループブックによる高大接続

高校段階で修得すべき英語・中国語の語学能力・グローバル人材資質、大学で修得すべき能力・資質を明確化した上で、いかに効率的・効果的に接続していくかを検討し、ポートフォリオ・ループブック等の教育成果測定法を導入



期待される成果

①入試改革の加速

高校段階での英語・中国語の語学能力、グローバル人材資質に関する成果を、グローバルポートフォリオ、グローバルループブックで適正に評価する入試

②高大接続による留学の質向上の加速

留学者数の量的増加の加速だけではなく、留学時期の早期化、留学期間の長期化、留学先の複数化などの質向上の加速

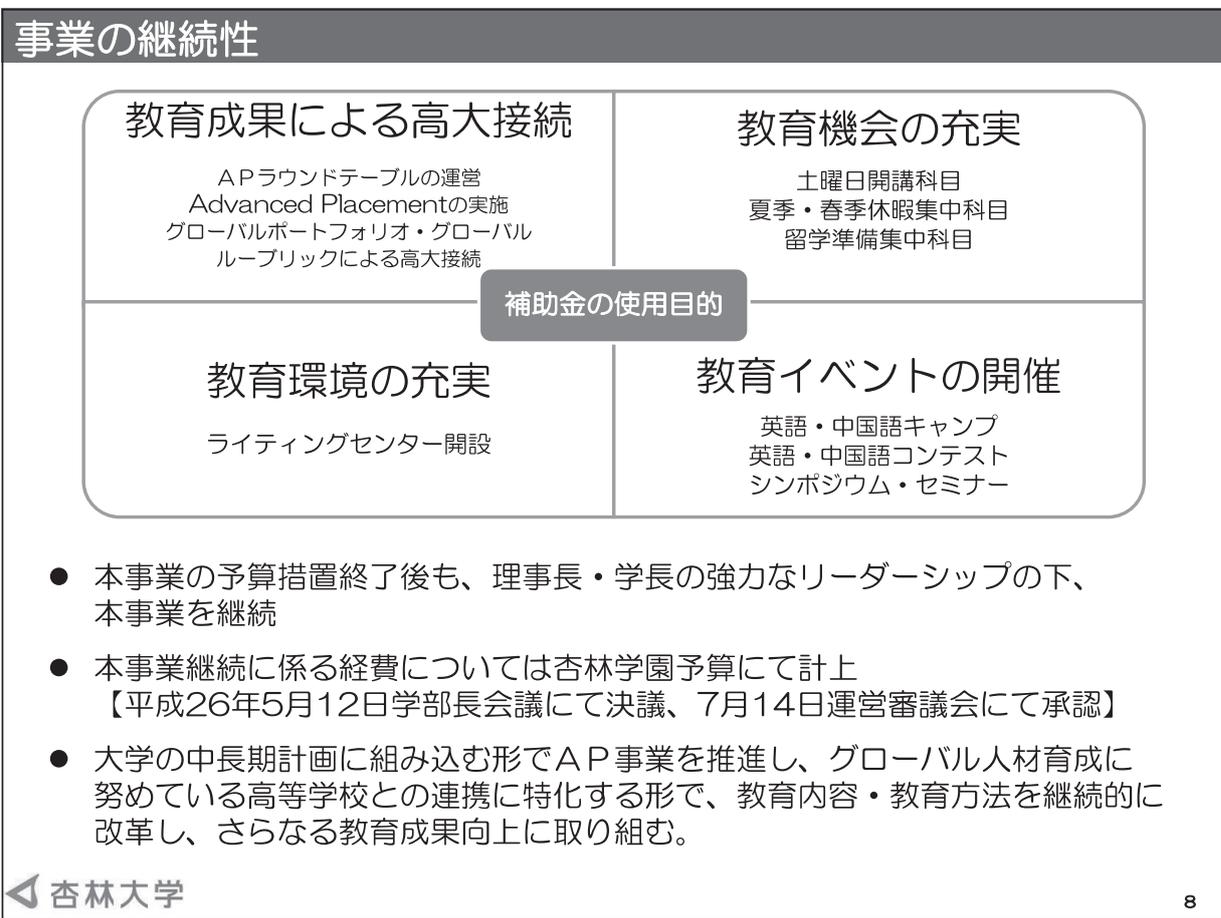
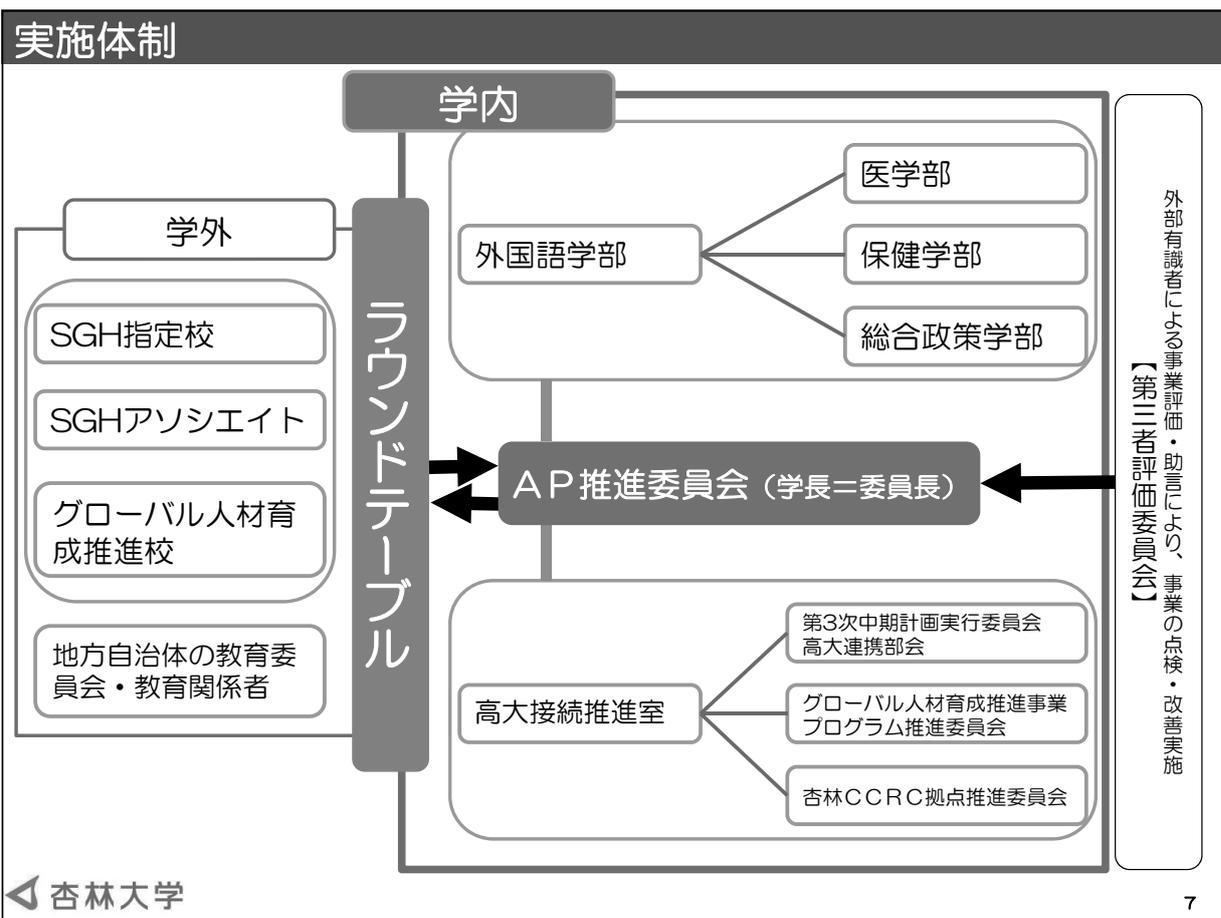
③日英中トライリンガル人材育成の加速

トライリンガル育成という目標に共鳴する高校と杏林大学が、教育成果測定法による連携・接続で、グローバル人材育成を加速

- ・高校で目指す到達レベル: HSK2級、TOEIC500点
- ・大学で目指す到達レベル: HSK5級、TOEIC800点

事業計画

	H.26 始動	H.27	H.28	H.29	H.30～ 継続
学内体制	<ul style="list-style-type: none"> ・大学教育再生加速プロジェクト推進委員会設置 ・高大接続推進室設置 ・外国語学部内にAP推進委員会設置 ・第3者評価委員会に関する検討 	<ul style="list-style-type: none"> ・AP推進委員会と第3次中期計画委員会(高大連携推進委員会)との運動 ・第3者評価委員会開催による外部評価実施 	<ul style="list-style-type: none"> ●三鷹市に井の頭キャンパス開設 ●4学部教育・研究機能を集約 	<ul style="list-style-type: none"> ・自己点検・評価継続 ・第3者評価委員会による外部評価継続 ・H.30以降の事業継続体制の構築 	
高大接続体制	<ul style="list-style-type: none"> ・杏林A Pラウンドテーブル実施 ・連携校拡大、重点連携校選定 ・グローバル人材育成連携協定締結 	<ul style="list-style-type: none"> ・杏林A Pラウンドテーブル実施 ・グローバル人材育成連携協定新規締結 	<p>【体制】</p> <p>AP推進の全学的サポート</p> <ul style="list-style-type: none"> ・AP推進委員会による自己点検・評価および第3者評価委員会による外部評価を踏まえた事業改善 <p>【高大接続体制】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・H.26～27事業の継続 ・英語・中国語レベルアップ・スキルアップの共催協議 ・グローバル関連新規科目の内容協議 <p>【教育】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・H.26～27事業の継続 ・スパー・グローバル導入設置 ・Advanced Placementによる単位認定 	<ul style="list-style-type: none"> ・H.26～28事業の継続 ・グローバル連携協定校とのFD・SD研修会実施 ・グローバル連携協定内容の発展的見直し 	<ul style="list-style-type: none"> ・H.26～29事業の継続
教育	<ul style="list-style-type: none"> ・ライティングセンター設置・稼働 ・時間割編成(グローバル・COC関連科目の土曜日開講、夏季・春季休暇集中科目化) ・新規科目設置(IELTS・TOEFL対策科目、教養グローバル関連科目) ・学則・履修規程措置(Advanced Placementのための学則・履修規程制定) 			<ul style="list-style-type: none"> ・Advanced Placementによる単位認定 <ul style="list-style-type: none"> > IELTS・TOEFL・TOEIC対策集中科目 > 高校生対象教養グローバル関連集中科目(春季・夏季) > グローバル・COC関連土曜日開講科目 > 英語・中国語キャンパス科目・中国語夏季研修 ・スパー・グローバル導入の効果測定 	
行事	<ul style="list-style-type: none"> ・連携高校関係者・高校生との協働による <ol style="list-style-type: none"> ① 英語・中国語キャンパス実施 ② TOEIC対策集中講座実施 ③ 中国語夏季研修実施 ・高大接続によるグローバルコンソーシアムの開催 		<p>【行事】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・H.26～27事業の継続 ・グローバルコンソーシアムの共催 	<ul style="list-style-type: none"> ・H.26～28事業の継続 ・英語・中国語レベルアップ・スキルアップ共催 	



Ⅲ. 事業実績と成果の概要

大学教育再生加速プログラム テーマⅢ（高大接続） 「日英中トライリンガル育成のための高大接続」 平成28年度実績概要

補助事業の目的

平成26年度「大学教育再生加速プログラム」に採択された本学の取組は、「グローバル人材育成」という教育目標を共有する高等学校との連携に特化する形で、「日英中トライリンガル育成のための高大接続」を目指し、教育内容・教育方法・教育成果等の発展的連携を推進するものである。

「大学による高等学校への学修機会の提供」に加え、「大学生（留学生を含む）による高校生への学修機会の提供」（ピアサポート）も実施し、留学の早期化・長期化・複数化への意識を積極的に醸成する。

本学の教育・研究機能の三鷹市集約（平成28年度、井の頭キャンパス開設）により飛躍的進展が見込まれる「スーパーグローバルハイスクール（SGH）指定校・SGH アソシエイト・グローバル人材育成取組校との高大接続」を通して、本学が取組むグローバル人材育成推進事業との複合的連携を図りながら、社会の要請に応える「グローバル人材の育成」を強力に加速させていくことを目的とする。

補助事業の実績

（1）全体

本事業採択後3年目となる平成28年度は、井の頭キャンパス開設により本学の教育・研究機能が三鷹市に集約されたことをきっかけとして、各種取組を新キャンパスにスムーズに移行させるとともに、改善されたキャンパスの立地条件を活かし高等学校との連携をさらに加速させた。ライティングセンターの稼働を通じて学生の留学準備の補助機能を強化するとともに、各種学内イベントの高校生への開放や大学全体への事業の波及、それによる各学部教員と高等学校との連携機会の増加を通じて、大学の教育リソースをさらに広範囲にわたって高校生に提供した。「杏林 AP ラウンドテーブル」の継続的開催を通じ、本事業の活動に対する高等学校側からのフィードバックを得る機会を設け、教育効果の向上のための意見交換を定期的実施した。学内では第三者評価委員会を開催することで、事業の目的・計画の妥当性や事業の進捗・達成状況の点検・評価を行い、課題を客観的な視点から分析し、各種事業の計画・実効性の改善を目指した。高校生への大学リソースの開放という観点から、「大学教養レベル・グローバル関連科目の夏季集中講座」を実施し、平成28年9月からは大学で実施している「グローバル関連科目」「COC 関連科目」を開放して、高校生

が聴講できるようにした。さらに、各種教育イベントの提供という観点からは、高校生と大学生が共に学修する場である「IELTS 対策講座」や「日英中トライリンガルキャンプ」の継続実施に加え、新たに「英語プレゼンテーションコンテスト」「中国語朗読・プレゼンテーション大会」に高校生の参加を呼びかけ、目的を共有する者が集う場での集中特訓や能動的学修を通じて、高大の参加者に対し留学に向けた強い意識の醸成を促した。アドバンスト・プレイズメントについて集中的に議論する目的で前年度に開始した「アドバンスト・プレイズメント・ラウンドテーブル」についても定期開催し、杏林大学における平成 29 年度からのアドバンスト・プレイズメント実施の準備を進めるとともに、複数大学によるアドバンスト・プレイズメント実現に向けて議論を重ねた。

① 「ライティングセンター」の取組

井の頭キャンパス「ライティングセンター」

平成 28 年 4 月、井の頭キャンパスへの移転と同時にライティングセンターを稼働させ、ルース・ファロン特任講師に加え、大学生 7 名がピアチューターとして大学生ならびに高校生の英語ライティングをサポートする体制が整った。

授業との連携

平成 28 年 4 月、ライティングセンターと授業の連動に関して、平成 27 年度より継続して、特に外国語学部設置科目の中でライティングを扱う科目を選定し、科目担当者に授業の中でライティングセンターの積極的利用を学生に奨励することと、授業の課題作成補助としてライティングセンターの利用斡旋を依頼した。

「ライティングセミナー」の実施

平成 28 年 9 月から 11 月にかけて、ライティングセンター主催の「ライティングセミナー」全 3 回を

杏林大学井の頭キャンパスで実施した。神奈川総合高等学校、順天高等学校、武蔵村山高等学校などから高校生が参加し、ルース・ファロン特任講師や大学生ピアチューターから英語ライティングに関する指導を受けた。

② 「杏林 AP ラウンドテーブル」の継続実施

第 6 回「杏林 AP ラウンドテーブル」

平成 28 年 5 月、第 6 回「杏林 AP ラウンドテーブル」を杏林大学井の頭キャンパスで開催し、聖徳学園高等学校、順天高等学校、関東国際高等学校、都立三鷹中等教育学校、都立青梅総合高等学校、大成高等学校、県立神奈川総合高等学校、日出学園高等学校、都立武蔵村山高等学校の 9 校 13 名が参加して、杏林大学の教職員と活発な意見交換を行った。

第 7 回「杏林 AP ラウンドテーブル」

平成 28 年 11 月、第 7 回「杏林 AP ラウンドテーブル」を杏林大学井の頭キャンパスで開催し聖徳学園高等学校、順天高等学校、関東国際高等学校、都立武蔵村山高等学校、都立三鷹中等教育学校、都立青梅総合高等学校、大成高等学校、日出学園高等学校の 8 校 11 名が参加して、杏林大学の教職員と活発な意見交換を行った。

第 8 回「杏林 AP ラウンドテーブル」

平成 28 年 2 月、第 8 回「杏林 AP ラウンドテーブル」を杏林大学井の頭キャンパスで開催し、聖徳学園高等学校、順天高等学校、関東国際高等学校、都立三鷹中等教育学校、大成高等学校、日出学園高等学校の他、新たに都立羽村高等学校を加え、計 7 校 10 名が参加して、杏林大学の教職員と活発な意見交換を行った。

③ 連携協定新規締結の拡充

武蔵村山高等学校

平成 28 年 11 月、杏林大学井の頭キャンパスにおいて、都立武蔵村山高等学校との高大連携協定を締結し、今後も連携を深めていくことを確認した。

大成高等学校

平成 28 年 11 月、杏林大学井の頭キャンパスにおいて、大成高等学校と高大連携協定を締結し、今後も連携を深めていくことを確認した。

神奈川総合高等学校

平成 28 年 12 月、杏林大学井の頭キャンパスにおいて、県立神奈川総合高等学校と高大連携協定を締結し、今後も連携を深めていくことを確認した。

④ 学内外への事業の周知

平成 28 年 4 月から平成 29 年 3 月にかけて、特設サイトを通じて、「杏林 AP ラウンドテーブル」などの大学と高等学校の会合、ライティングセンターの活動や、高校生にも開放した「英語キャンプ」、「大学教養レベル・グローバル関連科目の夏季集中講座」、「英語プレゼンテーションコンテスト」、「中国語朗読・プレゼンテーション大会」、「IELTS 対策講座」などの教育的イベント、高等学校教員と大学教員の教育に関する情報交換を目的とした「高校と大学をつなぐ FD/SD」、高校生と大学生の交流・協働学修をテーマとした「日英中トライリンガルキャンプ」などの活動について、継続的に発信を行った。

また平成 28 年 4 月から 3 月にかけて、医学部・保健学部・総合政策学部の教員による高校生への特別指導や高等学校訪問講義についても継続的に発信し、大学全体としての取組の実績を強調した。

(2) 教育

⑤ 高大連携イベントの開催

「ライティングセミナー」

平成 28 年 9 月から 11 月にかけて、ライティングセンター主催の「ライティングセミナー」全 3 回を杏林大学井の頭キャンパスで実施した。神奈川総合高等学校、順天高等学校、武蔵村山高等学校などから高校生が参加し、ルース・ファロン特任講師や大学生ピアチューターから英語ライティングに関する指導を受けた。

「グローバル AP セミナー」

平成 28 年 8 月、グローバル AP セミナー「同時通訳ブース見学会」を杏林大学井の頭キャンパスで実施し、連携高等学校の高校生 9 名が大学生とともに杏林大学井の頭キャンパスの同時通訳ブースを見学した。

平成 28 年 10 月から 11 月にかけて、神奈川総合高等学校が実施する「エンパワメントセミナー」と共催で「グローバル AP セミナー」を 3 回実施し、ルース・ファロン特任講師と外国語学部の関美和准教授がファシリテーター役として参加した。

「プレゼンテーションコンテスト」

平成 28 年 10 月、「英語プレゼンテーションコンテスト」「中国語朗読・プレゼンテーション大会」を杏林大学井の頭キャンパスで実施した。「英語プレゼンテーションコンテスト」には関東国際高等学校から 6 名、神奈川総合高等学校から 3 名の高校生が、「中国語朗読・プレゼンテーション大会」には関東国際高等学校から 2 名の高校生が参加し、大学生と朗読やプレゼンテーションのスキルを競い合った。

「出張講義」

平成 28 年 4 月から平成 28 年 3 月にかけて、前年度よりも積極的に高等学校からの「出張講義」の依頼を受け、合計で 40 件の「出張講義」を実施した。

⑥ 「教務的制度」の構築

ライティングセンターと授業の連動

平成 28 年 4 月、ライティングセンターと授業の連動に関して、平成 27 年度より継続して、特に外国語学部設置科目の中でライティングを扱う科目を選定し、科目担当者に授業の中でライティングセンターの積極的利用を学生に奨励することと、授業の課題作成補助としてライティングセンターの利用斡旋を依頼した。

高校生対象大学教養レベルグローバル関連科目

平成 28 年 8 月、夏季休暇を利用して「大学教養レベル・グローバル関連科目の夏季集中講座」を杏林大学井の頭キャンパスで開講した。本講座については科目 A「口語中国語」、科目 B「世界の英語とグローバルコミュニケーション」、科目 C「政治心理学入門」の 3 科目を設け、それぞれ、科目 A には高校生 9 名、科目 B には高校生 6 名、科目 C には高校生 2 名が参加し、大学生とともに学修に従事した。

高校生に開放するグローバル関連科目、COC 関連科目を選定

平成 28 年度秋学期より「グローバル関連科目」26 科目、「COC 関連科目 14 科目」を高校生に開放し、グローバル関連科目には計 23 名の高校生が参加し、大学生とともに講義を受講した。

「ルーブリック」の改善

平成 28 年 12 月、高大接続に資する教育成果測定に活用するための「ルーブリック」を完成させ、今後入学試験で活用するための前段階として、12 月に実施した推薦入試・AO 入試合格者向けの入学前

教育企画において参加者に配布、高校 3 年間の成果の記入を求めた。

⑦ 「アドバンスト・プレイスメント」実施に向けた検討

第 2 回「アドバンスト・プレイスメント・ラウンドテーブル」

平成 28 年 7 月、杏林大学井の頭キャンパスにおいて、第 2 回「アドバンスト・プレイスメント・ラウンドテーブル」を開催した。東京外国語大学・成蹊大学・亜細亜大学・東京女子大学・桜美林大学・杏林大学の 6 大学の関係者と、聖徳学園高等学校・関東国際高等学校・大成高等学校の関係者総勢 31 名が集まり、複数大学によるアドバンスト・プレイスメントの準備に向けての話し合いを行った。

第 3 回「アドバンスト・プレイスメント・ラウンドテーブル」

平成 28 年 11 月、杏林大学井の頭キャンパスにおいて、第 3 回「アドバンスト・プレイスメント・ラウンドテーブル」を開催した。複数大学によるアドバンスト・プレイスメントを目指し、東京外国語大学、亜細亜大学の関係者と杏林大学関係者が意見交換を行った。

「アドバンスト・プレイスメントに関する覚書」

平成 28 年 10 月から 12 月にかけて、大成高等学校、順天高等学校、神奈川総合高等学校、関東国際高等学校、聖徳学園高等学校、武蔵村山高等学校、調布南高等学校、府中東高等学校、藤村女子高等学校の 9 校と「アドバンスト・プレイスメントに関する覚書」を締結した。

大学内の規程改訂

平成 28 年 9 月から平成 29 年 3 月にかけて、アドバンスト・プレイスメント実施に向けて、平成 29 年度より施行する「学則」・「科目等履修生規程」・「学納金等取扱規程」・「杏林大学アドバンスト・プレイスメントに関する内規」を整備した。

大学間単位互換協定の締結

平成 29 年 3 月、杏林大学井の頭キャンパスにおいて、杏林大学と桜美林大学の間で、アドバンスト・プレイズメントによる大学間単位互換協定が締結された。

⑧ 学修機会の提供

「英語キャンプ」

平成 28 年 8 月、夏季休暇を利用して「英語キャンプ」を杏林大学井の頭キャンパスで実施し、計 5 名の高校生が参加して、大学生とともに英語の集中特訓に取り組んだ。

「日英中トライリンガルキャンプ」

平成 29 年 3 月、春期休暇を利用して「日英中トライリンガルキャンプ」を多摩永山情報教育センターで実施し、計 21 名の高校生が参加して、大学生や中国からの留学生とともに協働学修、アクティブラーニングに取り組んだ。

⑨ 「教職員研修」の実施

平成 28 年 7 月、「第 3 回 高校と大学をつなぐ FD/SD」を杏林大学井の頭キャンパスで開催した。専修大学附属高等学校の米元洋次教諭からアクティブラーニングについて講演があり、その後、参加した杏林大学の教職員 24 名、高等学校の教員 6 名の間で活発な質疑応答・議論が行われた。

(3) 事業の評価

⑩ 自己点検・第三者評価委員会

平成 28 年 9 月、杏林大学三鷹キャンパスにて 3 人の外部評価委員として、中学・高等学校の校長（高校教育全般）、大学教授（英語関係）、高校教諭（中国語関係）を招いて大学教育再生加速プログラム（AP）テーマⅢ（高大接続）の第三者評価委員会を開催した。

平成 28 年 9 月、AP 推進委員会にて第三者評価書が共有され、外部評価委員より受けた指摘や批判に基づき、具体的な改善案の検討が行われた。

補助事業における具体的な成果

(1) 全体

① 「ライティングセンター」の取組

井の頭キャンパス「ライティングセンター」

特任講師ならびにピアチューターから個別の指導を受けることで、訪問した学生は英語における自身の長所と短所を見極めることができ、英語ライティング学習に対するより積極的な姿勢が生まれた。

授業との連携

ライティングセンターのスタッフと英語授業を担当する教員たちの間で協力、調整が行われたことで、

指導を受けた学生は英語授業とライティングセンターの活動が相補的であるという認識を強くし、英語ライティング向上に向けてさらに意欲を高めることとなった。また、継続してライティングセンターの活用を促したことで、ライティングセンターを訪問した学生数は年間 214 名、実施した個人チューターセッションは年間 392 回とセンターの稼働率を高水準で維持することに成功した。

「ライティングセミナー」の実施

「ライティングセミナー」では、参加高校生は留学の際の準備書類の書き方や留学先でのレポート提出に必要なアカデミックライティングのスキルなどを学びつつ、ピアチューターから個別指導を受けることで客観的に自身のライティングを見つめなおす機会を得た。また、ピアチューターとして参加した大学生側も国際的な諸問題に高い関心を持つ高校生に刺激を受けつつ、ディスカッションを通じ、ライティングの基本を改めて確認するとともに指導に対するさらなる自信を深めた。

② 「杏林 AP ラウンドテーブル」の継続実施

第 6 回「杏林 AP ラウンドテーブル」

「ループリック」について、試行過程で協力を頂いた関東国際高等学校、順天高等学校から、「ループリック」で評価される高校生活の成果が、大学以後の学修にどう結びついていくのかについての事後調査の必要性などが指摘され、よりスムーズかつ効果的な高大接続のためのさらなる検討課題を得た。

第 7 回「杏林 AP ラウンドテーブル」

「ループリック」について、高校側から高校 3 年生のみならず、1・2 年生にとっても理解しやすいよう改良してほしいとの要望があり、今後も高校側と協力しながら試行を繰り返し、適宜改良を加えていくということで合意した。

第 8 回「杏林 AP ラウンドテーブル」

平成 29 年度より予定しているアドバンスト・ブレイスメントについて、高校側からスケジュールなどに基づく要望が提案され、可能な限り参加する高校生にとって理想的な環境を実現していくための契機が得られた。また、「日英中トライリンガルキャンプ」についても今後の改良・発展に向け、高大合同のより長期的な準備期間に基づくキャンプ実施を検討するなどの案が提案された。

③ 連携協定新規締結の拡充

都立武蔵村山高等学校

都立武蔵村山高等学校の高校生は「ライティングセミナー」などを通じ、これまでも杏林大学主催の高大接続イベントに参加しているが、今回の協定締結を機にさらに連携が深まることが期待される。

大成高等学校

大成高等学校の高校関係者からは、杏林 AP ラウンドテーブルなどを通じ、これまでも杏林大学主催の高大接続事業に協力を受けているが、今回の協定締結を機にさらに連携が深まることが期待される。

神奈川総合高等学校

神奈川総合高等学校の高校生は「ライティングセミナー」や「グローバル AP セミナー」などを通じ、これまでも杏林大学主催の高大接続イベントに参加しているが、今回の協定締結を機にさらに連携が深まることが期待される。

④ 学内外への事業の周知

「高校と大学をつなぐ FD/SD」

7 月に実施した「高校と大学をつなぐ FD/SD」

では、大学教職員 24 名、高等学校教職員 6 名が参加し、「アクティブラーニングとは何か」というテーマについて、専修大学附属高等学校教諭から講演が行われた。

「英語キャンプ」

8月の夏期休暇を活用して実施した「英語キャンプ」では、計5名の高校生が参加し、大学生とともに英語の集中特訓に取り組んだ。

「大学教養レベル・グローバル関連科目の夏季集中講座」

8月の夏期休暇を活用して実施した「大学教養レベル・グローバル関連科目の夏季集中講座」では計16名の高校生が参加し、大学生との協働学修、アクティブラーニングに取り組んだ。

「プレゼンテーションコンテスト」

10月に実施した「英語プレゼンテーションコンテスト」「中国語朗読・プレゼンテーション大会」では「英語プレゼンテーションコンテスト」に高校生10名、「中国語朗読・プレゼンテーション大会」に高校生2名が参加し、国際的な活躍に向け高い意識を共有する高大の学習者が互いに刺激を与えつつ学びに従事する理想的な環境が実現した。

「IELTS 対策講座・IELTS 受検」

平成29年1月から3月の土曜日を活用して実施した「IELTS 対策講座・IELTS 受検」では、25名の杏林大学生に高校生25名が加わり、留学に向けて高い意識を共有する高大の学習者が互いに刺激を与えつつ学びに従事する理想的な環境が実現した。

「日英中トライリンガルキャンプ」

3月に実施した「日英中トライリンガルキャンプ」では計21名の高校生が参加し、英語や中国語を通じた留学生との交流、及び、大学生との協働学修、アクティブラーニングに取り組んだ。

実習の提供

総合政策学部教員による順天高等学校での講演、

医学部細胞生理学教室教員による聖徳学園高等学校の生徒の指導、保健学部看護学科学校看護学教室教員による聖徳学園高等学校のいじめ防止活動の支援、保健学部臨床検査技術学科教員による順天高等学校の生徒へのDNA関連技術演習など、他学部でも個別教員と高等学校との連携が継続的に行われており、大学の持つ教育リソースをより広範囲にわたって高校側に提供することができている。

(2) 教育

⑤ 高大連携イベントの開催

「ライティングセミナー」

「ライティングセミナー」では、参加高校生は留学の際の準備書類の書き方や留学先でのレポート提出に必要なアカデミックライティングのスキルなどを学びつつ、ピアチューターから個別指導を受けることで客観的に自身のライティングを見つめなおす機会を得た。また、ピアチューターとして参加した大学生側も国際的な諸問題に高い関心を持つ高校生に刺激を受けつつ、ディスカッションを通じ、ライティングの基本を改めて確認するとともに指導に対するさらなる自信を深めた。

「グローバル AP セミナー」

グローバル AP セミナー「同時通訳ブース見学会」では、通訳の現場で用いられるような機器や設備に触れることで、参加した高校生ならびに大学生がさらなる語学学修とより専門的な学びに対する意欲を高める契機となった。

また神奈川総合高等学校「エンパワメントセミナー」との共催で行った「グローバル AP セミナー」では、参加した高校生が「難民の受け入れ」や「オリンピック」など時事的なトピックについて活発な英語での議論を行う機会を得た。

「プレゼンテーションコンテスト」

「英語プレゼンテーションコンテスト」「中国語朗読・プレゼンテーション大会」では、参加高校生ならびに大学生が、日常とは異なる空間で外国語での朗読やプレゼンテーションを行うことで、高い意識を共有する高大の学習者が互いに刺激を与えつつ競い合う理想的な空間が実現した。

「出張講義」

数多くの高等学校に「出張講義」として大学側の教員が出張し、大学での取組の説明や、大学入門レベルの講義を行うことで、より多くの高校生に杏林大学の取組や授業プログラムなどについて周知することができた。

⑥ 「教務的制度」の構築

ライティングセンターと授業の連動

継続してライティングセンターの活用を促したことで、ライティングセンターを訪問した学生数は年間 214 名、実施した個人チューターセッションは年間 392 回とセンターの稼働率を高水準で維持することに成功した。

高校生対象大学教養レベルグローバル関連科目

「大学教養レベル・グローバル関連科目の夏季集中講座」では大学レベルの講義に高校生と大学生がともに参加し、高い意識を共有する高大の学習者が互いに刺激を与えつつ能動的学修に従事する理想的な空間が実現した。

高校生に開放するグローバル関連科目、COC 関連科目を選定

グローバル関連科目では、特に金田一秀穂教授の「ことばと社会」の授業を関東国際高等学校の高校生 5 名が特別聴講生として半期にわたって大学生と同様に受講し、大学の授業の一環に触れる機会を提供できた。また、平成 29 年度に開始を控えたアド

バンスト・プレイスメントに向けて、高校生をより理想的な環境で受け入れるための様々なヒントを得る貴重な機会となった。

「ルーブリック」の改善

実際に高校生に「ルーブリック」を活用してもらうことで、その存在を入学予定者に周知させるとともに、高校生側から記入に際しての不明点などについて、具体的なフィードバックを得ることができ、入学試験に活用するためにさらに改良が求められる点を検討する重要な契機となった。

⑦ 「アドバンスト・プレイスメント」実施に向けた検討

第 2 回「アドバンスト・プレイスメント・ラウンドテーブル」

既にアドバンスト・プレイスメントの実績がある桜美林大学の和田満教育支援課長から、「桜美林大学で実施している科目等履修生に基づいた AP の現状」について説明がなされ、具体的実施に向けての課題等について貴重な情報を得る機会となった。また、参加大学や高等学校から忌憚のない意見が寄せられ、活発な議論が展開され、他大学を含めたアドバンスト・プレイスメントの実施のための足掛かりを得られた。

第 3 回「アドバンスト・プレイスメント・ラウンドテーブル」

杏林大学側の現況を説明し、平成 29 年度より実施することについて情報共有を行い、複数の大学に参加を現実的に検討することを呼びかける機会となった。

「アドバンスト・プレイスメントに関する覚書」

協定校を含む 9 校の高等学校と「アドバンスト・プレイスメントに関する覚書」を締結したことで、平成 29 年度よりアドバンスト・プレイスメントを実施するための基盤が整備された。

大学内の規程改訂

大学内の規則の改訂の準備を進めたことで、平成29年度よりアドバンスト・プレイスメントを実施するための学内的な基盤が整備された。

大学間単位互換協定の締結

桜美林大学とアドバンスト・プレイスメントによる大学間単位互換協定が締結されたことにより、複数大学が参加するアドバンスト・プレイスメントの実現に大きく前進したと同時に、さらに多くの大学に参加を呼びかけるための契機を得られた。

⑧ 学修機会の提供

「英語キャンプ」

「英語キャンプ」では、ネイティブ教員主導の下、日本語を一切使用しない環境の中で、高い意識を共有する高大の学習者が互いに刺激を与えつつ語学力を向上させ、異文化理解を深めた。

「日英中トライリンガルキャンプ」

「日英中トライリンガルキャンプ」では、高校生21名に加え、英語圏への留学経験のある大学生7名、中国からの留学生6名が参加し、中国語や英語を用いた活動に従事した。特に中国人留学生に対する英語インタビューでは、高校生ならびに大学生が国際語としての英語を活用しながら、日本と中国という異なる文化圏の「高校生活」を比較し相対化する重要な機会を得た。また、主にサポート役を担った大学生側も高い意識を持つ高校生に刺激を受け、自身の語学力向上、異文化理解に対する動機づけを新たにした。

⑨ 「教職員研修」の実施

アクティブラーニングというともすれば誤解を生みやすい概念について、アクティブラーニングとはそもそも「アクティブラーナー」を育てようという試みである」という根幹に立ち返った講演を聞くことで、改めてこの概念を見つめなおし、どのように高大接続に応用していけば、大学生ならびに高校生の学修に最も資する形となるかを考察する大きなヒントが得られた。

(3) 事業の評価

⑩ 自己点検・第三者評価委員会

高大接続に関連する各種教育イベント、ライティングセンターの活動等に関して、高校生にとって貴重な機会の提供であると同時に、ピアチューターとして参加した大学生の主体性も養うとして肯定的な評価がなされた。また、杏林 AP ラウンドテーブルや「高校と大学をつなぐFD/SD」等についても、高等学校と杏林大学の双方向的な意見交流が深まっている証左として評価された。これらの評価は本事業が行ってきた各種取組の妥当性を確認するとともに、それらをさらに積極的に進めていくための契機となった。

また各種教育イベントに関し、英語や英語圏の学生との交流に偏りがあるという指摘を受け、その内容を検討吟味した結果、平成29年3月に実施した「日英中トライリンガルキャンプ」では中国語圏からの留学生との協働学修を導入し、また、中国語を学修する時間も一部取り入れた。

そして、外国語ができることが将来の職業や生き

方にどのように繋がるのか、「将来のビジョン」を描ける講演や卒業生の話などを行うことが重要であるとの指摘を受け、卒業生、OB・OGまでをも含めたイベントの検討を開始した。

IV. 事業実績の具体的内容

〈運 営〉

IV-1. 事業体制の強化

＝ 1. 学内基盤の継続

杏林 AP 推進委員会の設置

平成 26 年度から継続して、本学に高大接続事業を推進するため、「大学教育再生加速プログラム (AP) 推進委員会 (通称「杏林 AP 推進委員会」) を設置している。この委員会は学長を委員長とし、以下副学長、各学部長、高大接続推進室長、学園事務局長らの教職員で構成され、事業活動の遂行状況の把握、事業計画・活動の点検評価、その他高大接続事業に関する業務を司っている。

高大接続推進室と高大接続推進委員会の設置

平成 26 年度から継続して、高等学校・教育団体等との効果的な高大接続のための調査・企画・連携を推進することにより、高等学校と杏林大学の教育内容、教育方法、学修成果、入学選抜、単位認定等の接続・連携を行うことを目的として高大接続推進室を設置し、その中に高大接続推進委員会を組織した。この委員会は室長を委員長とし、各学部からの教育職員と大学事務部長らの事務職員で組織され、推進室運営に関わる基本的事項の審議および各学部間の調整を図っており、事務局を地域交流課 (高大接続推進担当) に開設している。

＝ 2. 中期計画高大連携推進部会との連携

「大学教育再生加速プログラム (AP) 推進委員会」と「第 3 次中期計画実行委員会 (高大連携推進実行部会)」との連動を継続し、他学部への事業拡大を継続する。

高大接続推進委員会と全学的な「高大連携推進実行部会」との連動を継続し、双方の委員会の情報共有の促進、協力体制の強化、プログラムの調整をより綿密に行ったことに加え、キャンパス移転を通じて 4 学部のスムーズな連携が可能になったことで、AP 補助事業の全学的な波及に結びついた。

このことにより本補助事業で定期的に行っているイベント以外にも、総合政策学部教員による順天高等学校での講演、医学部細胞生理学教室教員による聖徳学園高等学校の生徒の指導、保健学部看護学科学校看護学研究室教員による聖徳学園高等学校のいじめ防止活動の支援、保健学部臨床検査技術学科教員による順天高等学校の生徒への DNA 関連技術演習、さらに、「大学教養レベル・グローバル関連科目の夏季集中講座」における総合政策学部教員の担当科目の開講など、他学部教員と高校との連携機会の拡大にも結びついた。

＝ 3. 学内会計監査

27 年度の事業内容を対象に、学内会計監査が総務課主体により実施され、一部に書類の不備はあるものの適正であるとの結果報告を受けた。

4. 「ライティングセンター」の本格稼働

ライティングセンターの設置と特任教員の雇用

平成28年4月、井の頭キャンパスへの移転と同時にライティングセンターを稼働させ、ルース・ファロン特任講師に加え、大学生7名がピアチューターとして大学生ならびに高校生の英語ライティングをサポートする体制が整った。ライティングセンターの目的は、様々な学問分野や場面で学生の役に立つような「書く技術」を高めることにあり、在学学生は、自ら書いた英文について教員や訓練を受けたピアチューターから1対1の指導・アドバイスを受けることができる。なお、ライティングセンターは高校生に対しても門戸が開かれており、「ピアチューター主導のレビューレッスン」や「ライティングセミナー」が開催され高大接続の場としても利用されている。



杏林大学 Writing Center for high school students “how to write in English”

[平成28年9月13日・14日 (火・水)
17:00~18:00]

- ・場所: 杏林大学 井の頭キャンパス
F棟207 ライティングセンター
- ・講師: ルース・ファロン先生と大学生チューター
- ・連絡先: 杏林大学 0422-47-8000 内線3616 栗原
- ・時間内にいつでも訪ねてきてください。
- ・自分で書いた英文も持ち込み可!

こんな感じで
すてきな英文



IV-2. 杏林 AP ラウンドテーブルの開催

開催日：第6回 杏林 AP ラウンドテーブル 平成 28 年 5 月 9 日
第7回 杏林 AP ラウンドテーブル 平成 28 年 11 月 21 日
第8回 杏林 AP ラウンドテーブル 平成 29 年 2 月 20 日

目的

「杏林 AP ラウンドテーブル」は、連携高校関係者と杏林大学が高等学校から大学までの人材育成について意見交換をする場として、本事業の中核的会議として位置づけられる。これまで高等学校と大学の関係は入学試験のみが接点となる場合がほとんどであったが、今後社会で求められるグローバルな視野と行動力、語学力をもつ人材を育成するため、「杏林 AP ラウンドテーブル」を通じて、教育活動や課外活動、そして教育・学習評価方法等について高等学校側と大学が意見を交換し、お互いのリソースを活用するためのプログラム内容について協議することを目的としている。

内容・実績

第 6 回 「杏林 AP ラウンドテーブル」

開催日：平成 28 年 5 月 9 日（月） 18：00～

参加高校：聖徳学園高等学校、順天高等学校、関東国際高等学校、
都立三鷹中等教育学校、都立青梅総合高等学校、大成高等学校、
県立神奈川総合高等学校、日出学園高等学校（千葉県市川市）、
都立武蔵村山高等学校

開催場所：杏林大学井の頭キャンパス C 棟 5 階会議室

平成 28 年 5 月 9 日（月）第 6 回「杏林 AP ラウンドテーブル」が開催された。第 6 回目となる本会議には高等学校 9 校 13 名が参加し、杏林大学からは学長、副学長以下、関係者 14 名が集まり、活発な意見交換を行うことができた。

1. ルーブリック改善について

新ルーブリック試行に協力してもらった関東国際高等学校と順天高等学校に対しお礼の言葉が述べられ、高校生からの意見を反映し、これからもルーブリックの改良を進めていくことを約束した。

高校側からは、「生徒は、落ち着いた環境であればより記入し易い。複数の生徒の回答を開示しても

らい共有したい。生徒たちがルーブリックを到達点としてポートフォリオを構成していくためにも、ルーブリックを早く完成していただきたい」また、「ルーブリックに記入していくためには高校入学段階からの活動が関わってくる。ルーブリックで評価することで生徒たちの成長の変化を見ていきたい。大学へ進学した後も、このルーブリックで計られた能力がどのように伸びていくかの事後調査も重要である」などの意見が出された。

2. 今年度の学修イベント紹介

イベントリーフレットに基づき、本学 AP 事業のイベントとして「ライティング指導」や「スピーチ

コンテスト」「英語キャンプ」「日英中トライリンガルキャンプ」「グローバル AP セミナー」などを紹介、イベントについての説明を行った。

3. アドバンスト・プレイズメント

平成 28 年 2 月に開催された近隣 6 大学等によるアドバンスト・プレイズメントに関するラウンド

テーブルの内容を報告し、アドバンスト・プレイズメントの実施に向けた授業の開放について説明を行った。高校側から、「交通費・時間・手間を考えた場合、単位を認定する方向で早めに確定してほしい」、「WEB 上での授業公開を考えてもよいのではないか」など様々な意見が出され、具体的な実施に向けた意見交換を行った。

第 7 回 「杏林 AP ラウンドテーブル」

開催日：平成 28 年 11 月 21 日（月） 18：00～

参加高校：聖徳学園高等学校、順天高等学校、関東国際高等学校、
都立武蔵村山高等学校、都立三鷹中等教育学校、
都立青梅総合高等学校、大成高等学校、日出学園高等学校

開催場所：杏林大学井の頭キャンパス C 棟 5 階会議室

平成 28 年 11 月 21 日（月）第 7 回「杏林 AP ラウンドテーブル」が開催された。当日は協力関係にある高等学校 8 校 11 名と杏林大学から学長、副学長以下、関係者 13 名が集まり活発な意見交換を行った。

1. 各種学修イベント

稲垣大輔高大接続推進室長より今年度実施予定である「IELTS 対策講座」や「日英中トライリンガルキャンプ」について告知が行われ、大学科目のオープン化に生徒を参加させた高校側からは「大学の授業の状況が分かり今後の生徒指導への参考になる、今後も着実に高大接続を進めていきたい」との意見が出された。

2. ルーブリックの改善について

新たに改善されたルーブリックについて説明がなされ、高校側から「高校 3 年生に内容を理解してもらうことはできるが、1・2 年生には少し難しいのではないかと指摘があり、できれば高校 1 年生か

ら 3 年生までの成長を知るために全学年に適用できるルーブリックが望ましい」との意見が出された。本学では外国語学部での入試にてルーブリックの使用を検討している旨を伝え更なる改良に繋げるについて高校側へ協力を求めた。

3. アドバンスト・プレイズメント

アドバンスト・プレイズメントについて、科目リストや応募要項の案を説明し、高校側からの意見を求めた。高校側からは、「大学の 5 限の授業に参加するためには、クラブ活動や高校の各種セミナーを受けていない高校 1・2 年生の生徒が対象となるので、時間的にも人数的にも難しい面がある」との指摘があり、科目配置などの調整を検討しなければならないことが課題となった。また夏期集中講座をアドバンスト・プレイズメントの一貫として扱ってほしいなどの要望も出された。また複数大学間にてアドバンスト・プレイズメント実施に向けて会議を行うことを予定している旨を高校側に伝えた。

第 8 回 「杏林 AP ラウンドテーブル」

開催日：平成 29 年 2 月 20 日（月） 18：00～

参加高校：聖徳学園高等学校、順天高等学校、関東国際高等学校、
都立三鷹中等教育学校、大成高等学校、日出学園高等学校、
都立羽村高等学校

開催場所：杏林大学井の頭キャンパス C 棟 5 階会議室

平成 29 年 2 月 20 日（月）第 8 回「杏林 AP ラウンドテーブル」が開催された。

当日は新たに都立羽村高等学校が参加し、この他、聖徳学園高等学校、順天高等学校、関東国際高等学校、都立三鷹中等教育学校、大成高等学校、日出学園高等学校の計 7 校 10 名と杏林大学から学長、副学長以下、関係者 12 名が集まり活発な意見交換が交わされた。

1. FD・SDの開催について

次年度に実施する FD・SD のテーマについて検討を行い、高等学校における外国語（英語等）教育の現状と大学への要望などが各校から出された。

2. アドバンスト・プレイズメント

ポール・スノードン副学長より、「近隣の 4 大学（亜細亜大学、成蹊大学、東京女子大学、東京外国語大学）とは、数回のラウンドテーブルを開催し協議を継続中であるが、新たに桜美林大学を訪問し、大変良い返事もらっている。少し距離の離れた共愛学園前橋国際大学（群馬県）、追手門学院大学（大阪府）も訪問し、参加を呼び掛けている。また、高校側はこの会議に出席している学校も含め計 9 校が賛同し、覚書を既に交わしており、この 4 月から本格的に開始していきたい」と現状について報告を行った。また高校側からは、「毎年学年暦が固まるのが 4 月にずれ込むことも多いので、アドバンスト・プレイズメントの申し込み期限を可能な限り遅くしてもらいたい」との要望が出され、本学からは申込期間について極力対応していきたい意向を示した。

//// 効果・成果

ラウンドテーブルを通じ、本学が実施する「日英中トライリンガルキャンプ」「ルーブリックの改善」、「アドバンスト・プレイズメント」の実施についてなど様々な活動に対する意見を得ることができ、またそこから大学・高等学校の双方にとってより教育効果の高いイベントや研修・講座、協定高校での講演会などの波及的効果も生まれ、活動がより一層深まり、また広がった。



IV-3. 連携協定書の調印

平成 28 年度に新たに連携協定を締結した高等学校は以下のとおりである。

- ・都立武蔵村山高等学校 東京都武蔵村山市
(協定期間：平成 28 年 12 月 1 日～平成 29 年 11 月 30 日)
- ・大成高等学校 東京都三鷹市
(協定期間：平成 28 年 12 月 1 日～平成 29 年 11 月 30 日)
- ・県立神奈川総合高等学校 神奈川県横浜市神奈川区
(協定期間：平成 29 年 1 月 1 日～平成 29 年 12 月 31 日)

上記期間について、双方いずれかから異議のない場合は、自動更新される。

目的

高等学校とグローバル人材育成連携協定を締結し高大接続体制を整備・発展させてゆくことが、継続的な本事業の遂行の要となるため、「杏林 AP ラウンドテーブル」や「日英中トライリンガルキャンプ」などに参加する高校と連携協定を行い、連携協定を締結することで相互の教育に係る交流・連携を通じて、高校生の視野を広げ、進路に対する意識や学習意欲を高めるとともに、大学の求める学生像及び教育内容への理解を深め、かつ高校教育・大学教育の活性化を図ることを目的とする。

内容・実績

都立武蔵村山高等学校

杏林大学と都立武蔵村山高等学校（東京都武蔵村山市）は、平成 28 年 11 月 7 日に杏林大学井の頭キャンパスにおいて高大連携の協定書に調印をした。調印式には、武蔵村山高等学校から加藤竜吾校長が、杏林大学からは跡見裕学長、ポール・スノードン副学長、坂本ロビン外国語学部長、稲垣大輔高大接続推進室長が出席し、それぞれ代表として加藤校長、跡見学長が協定書にサインし、今後も連携を深めていくことを確認した。

大成高等学校

杏林大学と大成高等学校（東京都三鷹市）は、平成 28 年 11 月 21 日に杏林大学井の頭キャンパスにおいて高大連携の協定書に調印をした。調印式には、大成高等学校から遠藤眞文校長が、杏林大学からは跡見裕学長、ポール・スノードン副学長、坂本ロビン外国語学部長、稲垣大輔高大接続推進室長が出席し、それぞれ代表として遠藤校長、跡見学長が協定書にサインし、今後も連携を深めていくことを確認した。

県立神奈川総合高等学校

杏林大学と県立神奈川総合高等学校（神奈川県横浜市神奈川区）は、平成 28 年 12 月 15 日に杏林大学三鷹キャンパス本部棟 11 階貴賓室において高大連携の協定書に調印をした。調印式には、神奈川総合高等学校から市川陽一校長、下園幸総括教諭、菅原喜一教諭が、杏林大学からは跡見裕学長、ポール・スノードン副学長、坂本ロビン外国語学部長、稲垣大輔高大接続推進室長が出席し、それぞれの代表として市川校長、跡見学長が協定書にサインし、今後も連携を深めていくことを確認した。

効果・成果

平成 28 年度に新たに連携協定を締結した高等学校 3 校はいずれの高等学校もすでに「杏林 AP ラウンドテー

ブル」に参加しており、本学が企画した AP 事業に関する様々なイベントへの生徒参加も積極的に取り組む中で、実質的に本学との幅広い高大接続を行ってきた。こうした経緯を踏まえ、杏林大学とのさらに深い様々な高大連携等を目指して協定締結に至った。

都立武蔵村山高等学校



大成高等学校



県立神奈川総合高等学校



IV-4. 高校と大学をつなぐ FD / SD の開催

開催日：平成 28 年 7 月 4 日

講演者：米元洋次氏 専修大学附属高等学校英語科教諭

テーマ：「アクティブラーニングとは何か－高等学校の教育現場から－」

開催場所：杏林大学井の頭キャンパス

目的

FD / SD は大学の教育と運営に関し、今や必須のものとなっている。大学教職員が高校教育の現状に対する理解を深め、特に高校でのグローバル化に対応する教育や外部連携について高校側の取り組みを知ること、杏林大学における「日英中トライリンガル育成のための高大接続」事業の推進の一助にする。

内容・実績

平成 28 年 7 月 4 日、杏林大学井の頭キャンパスにおいて「第 3 回 高校と大学をつなぐ FD/SD」が開催された。

専修大学附属高等学校の米元氏が「アクティブラーニングとは何か－高等学校の教育現場から－」をテーマとして講演を行った。米元先生はまず自己紹介と高等学校においてキャリア教育を日頃の授業に取り入れていることやファシリテーションスキルを活用していることを述べ、アクティブラーニングとは、学習者（生徒）を“アクティブラーナー＝自立した学習者”に教育によって導くことであるという自論を展開し、そして実際の授業にて KP 法を取り入れていることや学期始めのオリエンテーションが非常に重要であることについて具体的な事例を挙げながら説明した。最後に、同僚教師との会議や刺激の与え合い・あるいは外部でのファシリテーションスキルの研修などがアクティブラーニングの教育を行う上で大変役に立っている、すなわち、教員の学びが大切であると結び講演は終了した。

効果・成果

講演終了後には質疑応答がなされ、最近の英語の教科書は、アクティブラーニングに向いているのかどうか、アクティブラーナーとはどういう人なのか、アクティブラーニングの授業に参加しようとする子に対してはどう対処するかなどの質問が出され実際の授業でアクティブラーニングを取り入れることについて活発な意見交換を行った。今回の FD / SD を通じてアクティブラーニングについて再認識するとともに、高等学校と杏林大学の双方向的な意見交流がより一層深まった。



IV－5. 連携高等学校との意見交換

① 県立神奈川総合高等学校が本学を訪問

対 応 日：平成 28 年 5 月 2 日

高 校 名：県立神奈川総合高等学校

高校関係者：市川陽一校長、下園幸総括教諭、小野貴史教諭、菅原喜一教諭

大学関係者：ポール・スノードン副学長、坂本ロビン外国語学部学部長

稲垣大輔高大接続推進室長、青柳貴徳井の頭事務部副部長

主 な 話 題：神奈川総合高等学校がグローバル教育研究推進校に指定され、杏林大学との連携を深めるための話し合いを行った。

② グローバルウィークの担当講師について

対 応 日：平成 28 年 5 月～8 月

高 校 名：順天高等学校

高校関係者：中原晴彦国際部長

大学関係者：マルコム・フィールド教授、上野景文特任教授

晝間大郎地域交流課課次長

主 な 話 題：順天高等学校のグローバルウィークの担当講師について、推薦と連絡調整を行った。

③ 上級学校説明会

対 応 日：平成 28 年 6 月 8 日

高 校 名：武蔵村山高等学校

高校関係者：加藤竜吾校長、松崎真理子教諭、菅愛彦教諭、竹田有希教諭

大学関係者：青柳貴徳井の頭事務部副部長

主 な 話 題：模擬講義で看護の教員に協力してほしい旨の依頼を受け、今後の検討となった。

④ 日出学園高等学校の英語教育について

対 応 日：平成 28 年 6 月 9 日

高 校 名：日出学園高等学校

高校関係者：児玉孝喜マネージャー

大学関係者：岩本和良教授、八木橋宏勇准教授、青柳貴徳井の頭事務部副部長

主 な 内 容：日出学園高等学校の長期計画（英語教育）について本学の英語教員と数回にわたり意見交換及び打ち合わせを行った。

⑤ 高校生の大学授業見学について

対 応 日：平成 28 年 7 月 6 日

高 校 名：関東国際高等学校

高校関係者：黒澤真爾副校長、井上誠普通科学科長

大学関係者：ポール・スノードン副学長、坂本ロビン外国語学部学部長
稲垣大輔高大接続推進室長、青柳貴徳井の頭事務部副部長
晝間大郎地域交流課課次長

主 な 話 題：関東国際高等学校の日本文化コース設置にともない、高校生と高校教員ら 10～15 名の講義見学の申し出があった。検討の結果、金田一秀穂教授の科目を見学することとなった。

⑥ 講演会について

対 応 日：平成 28 年 8 月

高 校 名：三鷹中等教育学校

高校関係者：島田巧一朗教諭

大学関係者：小山三郎教授、青柳貴徳井の頭事務部副部長

主 な 話 題：三鷹中等教育学校の台湾修学旅行の事前研修の講演会について、その内容や構成等について意見交換を行った。

⑦ 進学説明会について

対 応 日：平成 28 年 8 月

高 校 名：武蔵村山高等学校

高校関係者：澤崎陽彦副校長

大学関係者：青柳貴徳井の頭事務部副部長、晝間大郎地域交流課課次長

主 な 話 題：武蔵村山高校の看護系進学希望者に対する説明会及び P T A によるバスツアーについて意見交換を行った。

⑧ 医学部実習について

対 応 日：平成 28 年 8～9 月

高 校 名：聖徳学園高等学校

高校関係者：大岡文夫教諭

大学関係者：後藤達也医学部事務課職員

主 な 話 題：「バイタルサインを測ってみよう」というテーマの医学部実習について、その内容や当日の詳細について、聖徳学園高等学校と意見交換を行った。

⑨ ライティングセミナーについて

対 応 日：平成 28 年 8～9 月

高 校 名：神奈川総合高等学校

高校関係者：菅原喜一教諭

大学関係者：ルース・ファロン特任講師（ライティングセンター担当教員）
晝間大郎地域交流課課次長

主 な 話 題：「ライティングセミナー」及び「エンパワーメントセミナー」の内容・
方法・課題等について、神奈川総合高等学校と意見交換を行った。

⑩ 中国語・英語プレゼンテーションコンテスト

対 応 日：平成 28 年 9 月

高 校 名：関東国際高等学校、神奈川総合高等学校

高校関係者：大島教諭、菅原喜一教諭

大学関係者：晝間大郎地域交流課課次長

主 な 話 題：中国語・英語プレゼンコンテストについてのテーマや方法について、
意見交換を行った。

⑪ 英語プレゼンテーションコンテスト

対 応 日：平成 28 年 10 月 8 日

高 校 名：関東国際高等学校、神奈川総合高等学校

高校関係者：黒澤眞爾副校長、菅原喜一教諭

大学関係者：北村一真准教授、晝間大郎地域交流課課次長

主 な 話 題：英語プレゼンテーションコンテストにおいて高校生や大学生の発表
力について意見交換を行った。

⑫ 中国語プレゼンテーションコンテスト

対 応 日：平成 28 年 10 月 8 日

高 校 名：関東国際高等学校

高校関係者：黒澤眞爾副校長、白井聖大教諭

大学関係者：宮首弘子教授、藤田由香利講師

主 な 話 題：中国語プレゼンテーションコンテストにおいて白井先生には評価委
員を依頼し、コンテスト終了後には内容や指導方法など次年度に向
けた意見交換を行った。

⑬ アドバンスト・プレイスメント

対 応 日：平成 28 年 10 月 13 日

高 校 名：大成高等学校

高校関係者：遠藤眞文校長

大学関係者：ポール・スノードン副学長、稲垣大輔高大接続推進室長
青柳貴徳井の頭事務部副部長、晝間大郎地域交流課課次長

主 な 話 題：アドバンスト・プレイスメントに関して、覚書の内容やその他の詳細についての質問があり、対応した。

⑭ アドバンスト・プレイスメント

対 応 日：平成 28 年 10 月 15 日

高 校 名：神奈川総合高等学校

高校関係者：下菌幸教諭

大学関係者：青柳貴徳井の頭事務部副部長、晝間大郎地域交流課課次長

主 な 話 題：アドバンスト・プレイスメントに関して、その時間割りや提供科目のリスト等についての質問があり、対応した。

⑮ 日出学園高等学校の英語教育について

対 応 日：平成 28 年 10 月 31 日

高 校 名：日出学園高等学校

高校関係者：藤原佐具子教頭、児玉尚樹部長、児玉孝喜マネージャー
鳥尾克二監事、小林教諭

大学関係者：ポール・スノードン副学長、坂本ロビン外国語学部学部長
稲垣大輔高大接続推進室長、岩本和良教授、八木橋宏勇准教授
青柳貴徳井の頭事務部副部長、晝間大郎地域交流課課次長

主 な 話 題：日出学園中学・高等学校の長期計画に基づき、実践的な英語力の強化と入試の変化に対応した学力の向上に向けたアドバイスと意見交換を行った。

⑯ グローバルウィークで講演

対 応 日：平成 28 年 11 月 2 日

高 校 名：順天高等学校

高校関係者：順天高等学校教員

大学関係者：上野景文特任教授

主 な 話 題：順天高等学校のグローバルウィークで講演を行うとともに、付随して教員と意見交換を行った。

⑰ 日出学園高等学校の英語教育について

対 応 日：平成 29 年 1 月 5 日

高 校 名：日出学園高等学校

高校関係者：堤雅義校長、他数名

大学関係者：岩本和良教授、八木橋宏勇准教授

他大学教員：原田範行東京女子大教授

主 な 話 題：前回に引き続き日出学園の英語教育に対する意見交換を行った。

⑱ インターンシップについて

対 応 日：平成 29 年 3 月 8 日

高 校 名：昭和鉄道高等学校

高校関係者：谷輪保賢教諭

大学関係者：青柳貴徳井の頭事務部副部長

主 な 話 題：杏林大学でのインターンシップの可能性について意見交換を行った。

⑲ 聖徳学園グローバルプロジェクト

対 応 日：平成 29 年 3 月 14 日

高 校 名：聖徳学園高等学校

高校関係者：伊藤正徳校長

大学関係者：ポール・スノードン副学長

主 な 話 題：聖徳学園高等学校のグローバルプロジェクトで挨拶し、意見交換を行った。

⑳ 日英中トライリンガルキャンプ

対 応 日：平成 29 年 3 月 25 日・3 月 26 日

高 校 名：神奈川総合高等学校、厚木高等学校

高校関係者：菅原喜一教諭、林教諭

大学関係者：坂本ロビン外国語学部学部長、稲垣大輔高大接続推進室長

宮首弘子教授、北村一真准教授、藤田由香利講師

青柳貴徳井の頭事務部副部長、栗原恵子地域交流課職員

主 な 話 題：日英中トライリンガルキャンプを行い、高校教員と普段の授業内容や指導方法や次年度に向けたトライリンガルキャンプの方向性について意見交換を行った。

㉑ 日出学園高等学校の英語教育について

高 校 名：日出学園高等学校

大学関係者：岩本和良教授、八木橋宏勇准教授

主 な 話 題：杏林大学と学校法人日出学園（千葉県市川市）は、より効果的な英語教育の実践を模索するため、2017 年度に協働を開始した。日出学園は、幼稚園・小学校・中学校・高等学校を擁しており、初等から中等教育まで一貫性のある教育実践が可能な環境にある。本学からは、外国語学部の岩本和良教授、八木橋宏勇准教授が「日出学園英語教育プログラム開発委員会」に参加し、コンセプトや副教材作成等で定期的に連携をはかっている。

IV-6. アドバンスト・プレイズメント・ラウンドテーブルの開催

開催日：第2回アドバンスト・プレイズメント・ラウンドテーブル 平成28年5月9日

第3回アドバンスト・プレイズメント・ラウンドテーブル 平成28年11月21日

目的

「アドバンスト・プレイズメント・ラウンドテーブル」は平成27年10月～12月に行われた「杏林 AP ラウンドテーブル」において開催が決定し、アドバンスト・プレイズメントの実現可能性、及び、それを具体化させるために様々な意見交換の場として設けられた。平成28年2月19日に開催された第1回「アドバンスト・プレイズメント・ラウンドテーブル」を受けて今年度は2回の実施となった。

内容・実績

第2回アドバンスト・プレイズメント・ラウンドテーブル

開催日：平成28年7月29日

参加大学：東京外国語大学・成蹊大学・亜細亜大学・東京女子大学・桜美林大学・杏林大学

参加高校：聖徳学園高等学校・関東国際高等学校・大成高等学校

開催場所：杏林大学井の頭キャンパスC棟5階会議室

平成28年7月29日、6大学の関係者と高等学校3校の関係者31名が集まり、第2回「アドバンスト・プレイズメント・ラウンドテーブル」が開催された。

ポール・スノーデン副学長の挨拶のあと、まず、桜美林大学の和田満教育支援課長から、桜美林大学で実施している科目等履修生に基づいたAPの現状について、高大連携協定校との協定書や提供科目リスト、実施後の高校生のアンケートなどの資料に基づき説明がなされた。

次に本学での取り組み状況と今後の課題が報告さ

れ、このアドバンスト・プレイズメントの仕組みづくりについて大学側は①単位認定が重要な課題であり、高校側は②学習の充実と③入試という現実が関わってくるので、この3点をどう調整していくかが大きな課題であることを述べた。

そして様々な意見交換が交わされ、大学間での連携と高校教員と大学教員の教育の接続に関する意見交換が必要であるという共通認識をもって会議は終了した。



第3回アドバンスト・プレイスメント・ラウンドテーブル

開催日：平成28年11月30日

参加大学：東京外国語大学、亜細亜大学、杏林大学

開催場所：杏林大学井の頭キャンパスD棟4階会議室

平成28年11月30日に第3回「アドバンスト・プレイスメント・ラウンドテーブル」が開催された。複数大学によるアドバンスト・プレイスメントを目指し、東京外国語大学、亜細亜大学の関係者と杏林大学関係者が意見交換を行った。冒頭の跡見裕学長の挨拶のあと、ポール・スノードン副学長より、杏林大学におけるアドバンスト・プレイスメントの実

施について近隣の高校9校から賛同の表明を得ており、杏林大学としてはまず単独で29年度より実施予定である旨を報告した。そして大学間のアドバンスト・プレイスメントに関する単位互換の協定書の案が出され、参加大学に検討していただけるよう他大学へ呼びかけを行った。この協定書案に対して様々な意見交換を行い、会議は終了した。

効果・成果

「アドバンスト・プレイスメント・ラウンドテーブル」を通じ、当該制度に関心のある高等学校や近隣の大学関係者との意見交換を行うことによって、大学間での連携と高校教員と大学教員の教育の接続に関する意見交換が必要であるという共通認識を得ることと、制度完成に向けて有益な意見や提案を得ることができた。



Number of Visits Per Student (based on incomplete data)

	1 visit	2-4 visits	5 or more visits
I. Spring Term	100	27	11
II. Autumn Term	50	9	7

Faculty From Which Students Came to the Center

	Tourism	Social Science	English	Chinese	Medical
I. Spring Term	50+	8	27	6	2
II. Autumn Term	23+	3	11	5	0

Note: This data is incomplete because some students did not record their Faculty when they filled out the information sheet.

Students Who Visited the Center, by Year

	1st Year	2nd Year	3rd Year	4th Year	Graduate
I. Spring Term	15	83	3	0	2
II. Autumn Term	7	39	6	5	0

Note: This data is incomplete because some students did not record their year in the university when they filled out the information sheet.

Comments: Most of the students who came to the Writing Center during this academic year were second-year students and students in the Tourism Faculty. This is partly because writing courses are required for second-year students in this Faculty and the professors of those courses encouraged their students to visit the Writing Center at least once a term. This type of cooperation between the Writing Center staff and professors in any faculty should continue to be encouraged.

B. Peer Tutors. In addition to working with students who came to the Writing Center, the Peer Tutors developed innovative review lessons for students using the functions of the Big Pad and related Internet technology. This was useful not only for students receiving help in the Center, but also for visitors to the Center during Open Campus events and for high school students who came to the Center for special seminars. Peer Tutors also helped

in preparing information for the visit by members of the MonKaSho.

C. Outreach Activities. During the academic year, several outreach activities were organized in the Writing Center. The Global Seminar on Academic Writing held three sessions in the Autumn Term for students from three high schools. A total of 9 students attended at least one of the sessions. The focus was on basic principles of academic writing and specific advice and practice for writing essays required on applications for universities overseas. Students had three writing assignments for the Seminar; each one was reviewed with corrections and comments by Ms. Fallon, giving each student individual feedback on his/her writing strengths and weaknesses. Peer tutors participated in the Seminar sessions and made effective use of the BigPad in giving the high school students useful help with their writing.

Open mini-classes for students from local high schools were offered by the Writing Center though no high school students were able to attend. This type of outreach activity should be offered again. Perhaps the timing of the sessions could be changed and communication with high school teachers could be strengthened in order to make this opportunity more easily available to high school students.

D. Recruitment of New Peer Tutors From the start of the Autumn Term, Ms. Fallon and the Peer Tutors began the process of recruiting new peer tutors for the 2017-2018 academic year. Applications were accepted from candidates who were then interviewed by Ms. Fallon and current Peer Tutors. Those who passed the interview were invited to observe tutoring sessions and work with Peer Tutors to learn the basic procedures of the Writing Center. An initial training session was held at the end of March for the new tutors. Training will continue in April and the Spring Term.

III. Outcomes of the Writing Center Activities

It is difficult to determine the extent to which the tutoring that students received at the Writing Center during this academic year improved their specific writing skills or their grades on their English assignments. However, the Writing Center staff believe that the following general goals were achieved.

- Receiving personalized, individual attention from peer tutors helped the students identify clearly their individual strengths and weaknesses in English generally and in English writing in particular. This gave students a more positive attitude toward studying and learning English and confidence in their ability to improve.
- The cooperation and coordination between the staff of the Writing Center and professors teaching English in their classes

had the positive effect of giving students the understanding that their class work and the support service of the Center are complementary. The efforts of the university to help students learn are consistent. Teachers and Writing Center staff are all focused on the same goals: helping students improve their skills.

- The concept of students (peer tutors) helping students is another outcome that is difficult to measure in numerical terms. Yet this outcome is also significant, both for the students and the peer tutors themselves. Some of the peer tutors will be English teachers in Japanese high schools and junior high schools, and their experience as tutors in the Writing Center will carry on through their own language classes in the future.
- The connections between Kyorin University and high schools has also been strengthened to some extent by the activities of the Writing Center. This is a small but important person-to-person contact between teachers, administrators and students from different educational spheres in Japan.
- Kyorin University's Writing Center is patterned on similar tutoring centers in universities throughout the world. Therefore it enhances the university's mission as a university with a global identity and focus.

IV. Concluding Comments

Suggestions for further development of activities of the Kyorin University Writing Center include the following:

- Continue and expand contact and cooperation with Kyorin teachers in all faculties. Develop appropriate short-term events or activities to make all students of the university aware of the benefits and services of the Center.
- Continue and expand contact and cooperation with high school principals,

teachers and students. Develop more attractive and effective activities to attract high school students to the Center.

- Consider the possibility of “mini-events” for students on the Inokashira campus. This could include open lunch-time “seminars” focusing on particular writing issues: Power Point English, Common Errors, English for Essays on Exams, Writing Tips for IELTS tests, Polite English for Business.
- Explore innovative uses of technology – especially the BigPad – to help students improve their English overall and their writing in particular. Include students and teachers in the process of innovation and creative uses of accessible, evolving technology.

- Hold short seminars for teachers of English writing classes (or any classes that use English in any way) to give them hints on effective ways to teach basic concepts of writing and to encourage them to make use of the Writing Center as complementary sources of learning for their students.

There are many ways in which the Writing Center can be integrated into many aspects of Kyorin University’s overall mission for the future. These suggestions are meant as a starting point for creative thinking on how the Center can expand its own goals and achievements in the future. The possibilities should be limited only by the users’ own imaginations.

ライティングセンターの運営

アカデミック・ライティングの学修

海外協定校留学などの長期留学に必要とされるライティング力の養成
特任講師の指導後、ピアチューターが在学生・高校生に対しマンツーマンセッション

高校生に対し Writing Seminar を開催

	H26	H27	H28
在学生利用者数 (月間平均人数)	28人	86人	60人
高校生利用者数 (年間人数)	4人	21人	32人
高校出張指導による 高校生利用者数	5人	5人	キャンパス立地 条件の改善により 中止

井の頭キャンパス移転後は
高校生利用者が増大



IV-8. アドバンスト・プレイズメントの実施準備

アドバンスト・プレイズメントの実施に向け、これまでに基本方針を固め「アドバンスト・プレイズメント・ラウンドテーブル」を通じて他大学や提携協定高等学校と意見交換を重ね、平成28年度は、実施科目の選定を行うためのグローバル関連科目の開放や実施科目の選定、桜美林大学との大学間単位交換協定の締結など実施に向けた事務的準備を進めてきた。

①アドバンスト・プレイズメント実施の基本方針

本学入学志望の高校生だけを対象にせず、制度本来の意義を踏まえ、修得した単位がより多くの大学で単位認定される、高校生にとってより有益な制度構築を図る

アドバンスト・プレイズメントラウンドテーブル3回開催

第1回(2016年2月18日) 文部科学省高等教育局専門職 河本達毅氏を招き
東京外国語大学、亜細亜大学、成誠大学、東京女子大学、
桜美林大学、杏林大学 6大学参加
聖徳学園高校、大成高校、関東国際高校、三原中等教育学校 4高校参加



単位交換協定により高校生にとってより有益な制度を目指す

33

②これまでの準備状況

「アドバンスト・プレイズメントに関する覚書」:9高校と締結
大成高校、順天高校(SGH指定校)、神奈川総合高校、関東国際高校、聖徳学園高校
武蔵村山高校、調布南高校、府中東高校、藤村女子高校

学則等学内規程整備

「学則」・「科目等履修生規程」・「学納金取扱規程」H29.4月施行予定
「アドバンスト・プレイズメントに関する内規」H29.4月施行予定

グローバル関連科目の高校生への開放:平成28年度秋学期

平成29年度からのアドバンスト・プレイズメント本格実施で先立ち、平成28年度秋学期閉講の
グローバル関連科目を高校生に開放
「ことばと社会」(担当:金田一秀穂)を高校生5人が学期初週に15回受講
「グローバルコミュニケーション論」(担当:坂本ロビン)・「風景景観論」(担当:安江枝里子)を
高校生10人が受講

33

③H29年度アドバンスト・プレイズメント実施科目

開放科目数: 68科目(春学期・秋学期合計)

医学部 2科目
保健学部 4科目
総合政策学部 25科目
外国語学部 37科目

高校生が受講しやすい職業系科目中心の科目構成

次年度以降は高校生が受講しやすい科目に設定することが課題

春学期は学部である外国語学部だけでなく、全学域にアドバンスト・プレイズメントを実施

34

- ①アドバンスト・プレイズメント実施の基本方針
- ②これまでの準備状況
- ③平成29年度アドバンスト・プレイズメント実施科目

④桜美林大学とアドバンスト・プレイズメントによる大学間単位交換協定を締結

平成29年3月21日(火)、井の頭キャンパスC棟5階会議室にて、杏林大学と桜美林大学との、アドバンスト・プレイズメントによる大学間単位交換協定締結式を行った。桜美林大学からは、三谷学長、小池総括副学長、武村教務部長が、本学からは、跡見学長、スノードン副学長、坂本外国語学部長、稲垣高大接続推進室長が出席した。跡見学長は、「本学は3年前に文科省のAP補助事業に採択され、これまで様々な高大接続事業を進めて来ており、高校生が大学の授業を受講し、単位を先取りするアドバンスト・プレイズメント(以下AP)に取り組んでいます。さらに複数の大学と手を結び、その大学間で単位を認定し合う制度を模索してきました。この度、既に長年にわたって自校でAPを推進し、その

ノウハウをお持ちの桜美林大学と協定を締結できることは、大変光栄なことで、今後さらに多くの大学と連携を結ぶきっかけになると大いに期待しております」と述べ、桜美林大学の三谷学長が、「グローバル化された社会に巣立つ若者たちは外国語に精通していなければなりません。ただし、英語だけではなく、他の外国語や文化、それに加えて高い専門性のある科目を学ぶことも必要なので、今回の杏林大学との協定締結でさらにその機会が促進されることを望んでいます」と挨拶を行った。

今回の大学間単位交換協定締結をきっかけに、今後、多くの大学がこの制度に参加し、「広い地域で、複数大学間のアドバンスト・プレイズメント」が促進されることが期待される。

IV-9. 大学教養レベル・グローバル関連科目 夏季集中講座

目的

「大学教養レベル・グローバル関連科目の夏季集中講座」は高校生と大学生が共に学ぶことを目的とし、平成28年8月22日から27日にかけて3科目の講座を開講した。

なお、実際の開講は台風の影響により8月23日からとなった。

内容・実績

科目A「口語中国語」

平成28年8月23日(火)、8月24日(水)の2日間にわたり杏林大学井の頭キャンパスにて、中国語のステップアップを目指した集中講座である口語中国語(科目A)を開講した。集中講座は本学の1・2年生の学生を対象とし、本学学生31名に加え、「日英中トライリンガル育成のための高大接続」事業の一環として関東国際高等学校からの高校生9名も加わり、計40名の参加となった。中国語ネイティブ教員の指導の下、午前中は3クラスに分かれて文法復習や会話表現などそれぞれのレベルに合わせた内容を学び、午後には各クラスに中国人留学生が加わり、発音指導や交流を楽しみながら会話練習などを行った後、中国語での映画の一場面を見ながらセリフの書き取りにも挑戦し、受講生たちは中国語についてさらなる理解を深めた。

科目B「世界の英語とグローバルコミュニケーション」

平成28年8月24日(水)、25日(木)の2日間にわたり、杏林大学井の頭キャンパスにて「大学教養レベル夏季集中講座」の科目B「世界の英語とグローバルコミュニケーション」を開講した。本講座は高大接続推進の一環として実施されたもので、6名の高校生と13名の在学生在が同教室で受講し、前半では英語をとりまく世界的状況に関する知識を深め、後半では日米の比較やインターネット上の情報の分析、さらに、デンマークやノルウェーといった非英語母語国のビジネスにおける英語の用い方の比較など、より具体的なテーマについて考察した。最終的に受講者はそれぞれが選んだテーマについてグループで討論し、その内容を英語で発表することで、学んだ知識やスキルをいかに実践するかについても理解を深めた。

科目C「政治心理学入門」

平成28年8月26日(金)、27日(土)の2日間にわたり、杏林大学井の頭キャンパスにて「大学教養レベル夏季集中講座」の科目「政治心理学入門」を開講した。本講座は高大接続推進の一環として実施されたもので、2名の高校生と4名の在学生在が同教室で受講した。前半では政治心理学のベースとなる社会心理学について基礎的な知識を理解し、後半では政治心理学の中でもとりわけ集団や集団の圧力などのテーマについて考察を行った。またグループワークなども取り入れながら、受講生たちは政治心理学の基礎的な内容について理解を深めた。

効果・成果

「大学教養レベル・グローバル関連科目の夏季集中講座」を通じ、計16名の高校生が参加し、大学生との協働学修、アクティブラーニングに取り組んだ。



IV-10. 大学教養レベル・グローバル関連科目・COC 関連科目の開放

目的

これまで大学で実施している「グローバル関連科目」「COC 関連科目」を高校生へ開放し、高校生が聴講できるようにすることで幅広い学びを高校生へ提供することを目的とする。

内容・実績

平成 28 年度秋学期より「グローバル関連科目」26 科目、「COC 関連科目」14 科目を高校生に開放し、グローバル関連科目には計 23 名の高校生が参加し、特別聴講生として大学生とともに講義を受講した。

効果・成果

グローバル関連科目では、特に金田一秀穂教授の「ことばと社会」の授業を関東国際高等学校の高校生 5 名が半期にわたって大学生と同様に受講し、大学の授業の一環に触れる機会を提供できた。また、平成 29 年度を開始を控えたアドバンスト・プレイスメントに向けて、高校生をより理想的な環境で受け入れるための様々なヒントを得る貴重な機会となった。

平成 28 年度
グローバル関連科目のオープン化

区分	28 年度科目名称	学期	曜日	時限	教員氏名
2	グローバルコミュニケーション論 (中・観)	秋	火	3	坂本 ロビン
5	異文化コミュニケーション	秋	木	3	金田一 秀穂
6	ことばと文化	秋	金	4	楠家 重敏
9	ことばと社会	秋	金	5	金田一 秀穂
11	日本と世界の近現代史	秋	月	5	楠家 重敏
13	アジアの文学・文化 (日)	秋	月	4	荒川 みどり
14	アジアの文学・文化 (中)	秋	金	2	小山 三郎
15	アジアの文学・文化 (韓)	秋	木	3	鄭 英淑
16	グローバル人材論 (英)	秋	火	3	黒田 有子
19	アジアン・ホスピタリティ	秋	金	4	岡野 俊介
21	地域圏研究Ⅱ (韓国)	秋	月	5	鄭 英淑

COC 関連科目のオープン化

区分	28 年度科目名称	学期	曜日	時限	教員氏名
2	日本文化論	秋	金	2	上野 景文
8	プロジェクト演習Ⅱ① (観)	秋	水	2	安江 枝里子
9	プロジェクト演習Ⅱ② (観)	秋	水	2	井手 拓郎
10	プロジェクト演習Ⅱ③ (観)	秋	金	2	安江 枝里子
11	プロジェクト演習Ⅱ④ (観)	秋	金	2	井手 拓郎

IV-11. 日英中トライリンガルキャンプの実施

実施日：平成29年3月25日・3月26日
場所：多摩永山情報教育センター
参加者：高大連携高校生21名、連携高校教員2名
杏林大学学生（ピアチューター）8名、杏林大学留学生5名
杏林大学教職員7名

目的

この学修キャンプは、平成26年度に本学が採択されて以来行われる短期集中プログラムであり、留学経験者や海外留学生を中心とする外国語学部の学生と国際志向の強い高校生とが学年や学校の枠を超えて交流し、日本語・英語・中国語の重要性を再確認することを目的としている。

内容・実績

1日目（平成29年3月25日）

まず北村准教授より概要説明と翌日のプレゼンテーションに向けた準備説明が英語で行われた。そしてイントロダクションとして藤田講師から中国語の簡単な挨拶や基本的な表現について学び、学生は中国人留学生へのインタビューに備えた。その後、高校生たちは、各チームに配置された留学生に「中国での高校生活について」英語でインタビューし、日本の高校生活との違いについて時間をかけてパワーポイントにまとめる作業を行った。その際、側にはピアチューターである本学学生がチーム毎に付き、適確なアドバイスを言いながら交流を深めた。

2日目（平成29年3月26日）

朝食後、発表用パワーポイントの最終確認を行った後、チーム毎に英語でプレゼンテーションを行った。各班のピアチューターの挨拶を皮切りに、高校生全員が自分の持てる英語力を駆使してプレゼンテーションし、どのチームも見ごたえのある発表を

することができた。

発表後には高校教員やピアチューターから英語で色々な質問をされ、高校生たちは堂々と応じることができ、2日間のプログラムが無事に終了した。

効果・成果

本学の英語学科・中国語学科・観光交流文化学科の大学生がそれぞれの強みを生かして高校生とグループワークを行い、特に中国人留学生に対する英語インタビューでは、高校生ならびに大学生が国際語としての英語を活用しながら、日本と中国という異なる文化圏の「高校生活」を比較し相対化する重要な機会を得た。また、主にサポート役を担った大学生側も高い意識を持つ高校生に刺激を受け、自身の語学力向上、異文化理解に対する動機づけを新たにした。

参加した高校生からは、「中国や香港の留学生への英語のインタビューを通して、文化の違いや生活環境の違いが学べて良かった」などの感想も寄せられた。



IV-12. 英語キャンプの実施

目的

このキャンプは、ネイティブ教員主導の下、日本語を一切使用しない環境の中で大学生と高校生と一緒に学び、活動することで双方が刺激し合い、自己の英語力を最大限に高めることを目的とする。

内容・実績

平成 28 年 8 月 9 日・8 月 10 日の 2 日間にわたり「杏林大学 夏季英語キャンプ 2016」を井の頭キャンパスにおいて開催し、杏林大学外国語学部の学生 14 名と高校生 5 名（都立三鷹中等教育学校 1 名、大成高等学校 2 名、聖徳学園高等学校 1 名、都立武蔵村山高等学校 1 名）が参加した。

In the summer of 2016, two days were set aside for the annual Kyorin Summer Camp. It was designed as an English immersion camp and was held at Kyorin University Inokashira Campus. In attendance were fourteen Kyorin students and five visiting high school students. Four full-time Special Lecturers provided the guidance necessary for the students to achieve a valuable experience. The course work included a variety of activities. Some activities focused on pronunciation, critical thinking and vocabulary, while others concentrated more directly on cultural awareness and social perspectives.

The groups were designed to be small, allowing the teachers the ability to assist students when needed. Tongue twister challenges were used to highlight the individual needs of each student and provided feedback on how to improve their pronunciation and fluency. Information gap activities pushed the students to use critical thinking skills to solve problems. Other challenges included acting out specific situations. This provided an opportunity to discuss observed behaviors and make well-thought-out conclusions, as well as how these conclusions may affect their cultural understanding. Throughout the two-day program, the students' vocabulary, grammar, and pronunciation were observed by the attending instructor, and corrections were made when necessary.

The objective of the program was focused on developing both language skills and using language in unique contexts. The development of the core language needs of the students was taken into account when forming the curriculum, but cultural understanding and conventions were considered key elements within this structure. The program began with students introducing themselves to each other in English. Once the students were comfortable in their groups, they proceeded to the next activity. A relaxed, open and friendly atmosphere was always maintained. This effort was made so that the students were as comfortable as possible while they shared information about themselves, sometimes to complete strangers. The students were continually encouraged to express their opinions and ideas. Each activity had a specific focus to allow the student a chance to focus on the task at hand. Through careful observation, the lecturer was able to consider the proficiency level of each individual. Within this process, error correction could be personalized and appropriate for each student.

After the first day, homework assignments were given to allow the student time to reflect on what they had studied during that day. This information was recorded into the students' work pamphlet and then submitted to the instructors who would then grade them and provide feedback. On the second day, there was also time set aside

to discuss the objectives of the program and to summarize the students' achievements as well as their future goals.

In summary, the students reported on having learned new vocabulary and some interesting facts. Many students also stated their need to have

more courage when using English to express themselves, promising that they would try harder to do so in the future. This was a great opportunity for all involved to reflect on the future and how best to proceed.



IV-13. プレゼンテーションコンテストの実施

目的

これまで本学在学学生を対象として実施していた「英語プレゼンテーションコンテスト」「中国語朗読・プレゼンテーション大会」に高校生参加を呼びかけ、目的を共有する者が集う場での集中特訓や能動的学修を通じて、高大の参加者に対し留学に向けた強い意識の醸成を促す。

【中国語朗読・プレゼンテーション大会】

内容・実績

平成28年10月8日（土）杏園祭の初日に中国語学科ゼミナール聯合（張ゼミナール・千野ゼミナール・詹ゼミナール）主催による中国語朗読・プレゼンテーション大会が本学国際交流プラザにて開催された。出場者は中国語学科の1年生から3年生までの学生15名に加え、高大接続事業の一貫として今年度は関東国際高等学校より高校生2名も参加し、約50名が来場するなか大盛況のうちに終了した。

本大会は朗読部門とプレゼンテーション部門に分かれ、朗読部門では7つの漢詩から1つを選び、中国語学科の1年生が中国語の発音や間の取り方に加え表現力を競った。

またプレゼンテーション部門では「あなたが出会った中国」「中国人に伝えたい日本の魅力」をテーマとして、1人または複数チームで出場した。それぞれが内容作りから発表に臨み、パワーポイントを

使用して中国語での表現力やパフォーマンスを競った。

審査員には関東国際高等学校白井先生、杏林大学中国語学科の教員・卒業生・中国人留学生6名を迎え、審査し特別賞には高校生が選ばれた。

審査員からは「どの発表も素晴らしく、練習を重ねてきたことが伺えた」という評価に加え「パワーポイントの見せ方にもう少し工夫を」といった今後につながる指摘もあった。

効果・成果

これまで学内イベントとして開催されてきた本大会に、高校生も参加することで学年を越え、また高校と大学の枠を越えて、お互いに刺激を受ける貴重な場となった。今回の参加学生にとって本大会が成長の場となることを期待し、またこうしたイベントを通じて高等学校と大学の連携を更に深めていきたい。

【英語プレゼンテーションコンテスト2016】

内容・実績

平成28年10月8日（土）に、杏園祭と同時開催で『英語プレゼンテーションコンテスト2016』が開催された。プレゼンテーションの企画自体は従来も杏園祭プログラムの一環として行われてきたが、今年度はこの企画を高大接続事業の一つとして位置づけ、大学生のみならず高校生も参加できる大会とし、さらに審査による優秀賞の決定というコンテスト色を強めたイベントとした。

当日は、神奈川総合高等学校から3名、関東国際高等学校から6名、そして、杏林大学から12名の学生が参加し、それぞれ、個人の部と団体の部に分かれ、ビジネスプランや教育に関する提言をテーマにプレゼンテーションのスキルや英語での表現力、説明力を競い合った。最終的に各プレゼンテーションは3名の審査員によって評価され、個人の部と団体の部のそれぞれで最優秀賞と特別賞が決定された。

//// 効果・成果 //////////////////////////////////////

大学生と高校生が一堂に会し、日々の学修の成果を競い合うというのは貴重な機会であるだけに、双方がお互いから刺激を受けることとなった。今回参

加された皆さんがこの経験を一つの糧としてさらに高い目標を達成できるよう邁進していただけることを願いつつ、杏林大学では今後もこのようなイベントを豊富に用意し、高大接続の機会拡大を図っていきたい。



IV-14. グローバル AP「同時通訳ブース見学会」の実施

目的

杏林大学の外国語学部中国語学科では「中国語学科・日中通訳翻訳プログラム」を通じて4年間で世界に通用する中国語が使える人材育成を目指しており、本学には同時通訳演習室が設置されている。本見学会は本学学生と高校生に実際の授業で使用する同時通訳演習室を体験してもらい、大学での学びに対しより一層の理解を深めることを目的とする。

内容・実績

平成28年8月23日、杏林大学井の頭キャンパスにてグローバル AP「同時通訳ブース見学会」を開催した。当日は本学外国語学部1年生・2年生の24名、連携高校の生徒9名が参加した。高校生は初めに施設説明を受け、中国語学科3年生による日中同時通訳のデモンストレーションを見た後で、実際に通訳ブースに入り機器の操作などを体感した。

見学会に参加した高校生からは「同時通訳演習室という部屋を見学し、オリンピックなどで使用されているものと同じ機械が置いてあり、すごいなと思った。同時通訳についてもっと知りたいと思った」「大学でこんな勉強もできるなんて知らなかった。日本語と中国語を同時に聞いて不思議な感じがした」という声があった。

効果・成果

今回の見学会を通じ、本学での学びが少しでも高校生に伝わったのではないかと感じられると同時に、こうした施設に対し高校生の関心の高さも伺えた。グローバル AP「同時通訳ブース見学会」終了後には高校生にセミナー修了証が付与された。



IV-15. グローバル AP「ライティングセミナー」の実施

開催日：第1回	グローバル AP	ライティングセミナー	平成 28 年 9 月 10 日
第2回	グローバル AP	ライティングセミナー	平成 28 年 10 月 15 日
第3回	グローバル AP	ライティングセミナー	平成 28 年 11 月 19 日

目的

平成 28 年 9 月より 3 回にわたって行ったグローバル AP「ライティングセミナー」はライティングセンターを担当しているルース・ファロン特任講師の指導で高校生に対し留学のための応募書類としてのエッセイの書き方の説明と、実際のライティング指導を行うことを目的とする。

内容・実績

第1回 グローバル AP ライティングセミナー

平成 28 年 9 月 10 日、第 1 回グローバル AP「ライティングセミナー」が本学ライティングセンターにて行われた。神奈川総合高等学校の生徒 5 名、順天高等学校の生徒 2 名と、引率教員 3 名が参加し、第 1 回目はまずアメリカと日本の大学の入学者募集方法の違いや、応募するエッセイに求められる視点について、詳しい説明が行われた。その後、生徒が自分自身のセルフアセスメントを 5 つのテーマについて英語のキーワードで書く練習も行われた。

第2回 グローバル AP ライティングセミナー

平成 28 年 10 月 15 日、第 2 回グローバル AP「ライティングセミナー」が本学ライティングセンターにて行われた。神奈川総合高等学校、武蔵村山高等学校、順天高等学校から 5 名の高校生が参加し、高校生はルース・ファロン特任講師と杏林大学の学生 2 名のピアチューターのもと、英語で書く練習の指導を受けた。途中、高校教員 1 名の見学もあり、外国の学校へ留学する際にいかに魅力的な application を書くかについての解説と実践指導も行われた。

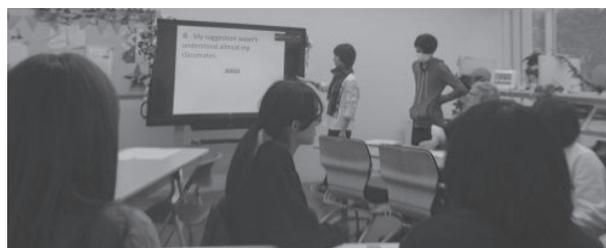


第3回 グローバル AP ライティングセミナー

平成 28 年 11 月 19 日、第 3 回グローバル AP「ライティングセミナー」が本学ライティングセンターにて行われた。順天高等学校と神奈川総合高等学校から 4 名の高校生と、教員 1 名が参加した。第 3 回目は英文アカデミックライティングの構成原理について過去 2 回のセッションの復習を行った後、大型スクリーンを用いて高校生の宿題の文の添削を行った。最後に、3 回のセッションの要点を確認し、高校生は学習上得た点についてのフィードバックを受け本セミナーが終了した。

効果・成果

全 3 回のグローバル AP「ライティングセミナー」を通じて、参加高校生は留学の際の準備書類の書き方や留学先でのレポート提出に必要なアカデミックライティングのスキルなどを学びつつ、ピアチューターから個別指導を受けることで客観的に自身のライティングを見つめなおす機会を得た。また、ピアチューターとして参加した大学生側も国際的な諸問題に高い関心を持つ高校生に刺激を受けつつ、ディスカッションを通じ、ライティングの基本を改めて確認するとともに指導に対するさらなる自信を深めた。



IV-16. グローバル AP「エンパワメントセミナー」の実施

開催日：第1回 グローバル AP エンパワメントセミナー 平成 28 年 10 月 17 日
第2回 グローバル AP エンパワメントセミナー 平成 28 年 10 月 31 日
第3回 グローバル AP エンパワメントセミナー 平成 28 年 11 月 14 日

目的

平成 28 年 10 月 17 日から 3 回にわたり神奈川総合高等学校と共催でグローバル AP「エンパワメントセミナー」を行った。神奈川総合高等学校にて開催され本学からはルース・ファロン特任講師と関美和准教授が、高校の先生とチームティーチングを行い、ワークショップを進めた。

内容・実績

第1回 グローバル AP「エンパワメントセミナー」

平成 28 年 10 月 17 日、神奈川総合高等学校と共催で行ったグローバル AP「エンパワメントセミナー」第1回が開催となり、「進歩」をベーステーマとして、第1回目は「女性のエンパワメント」について掘り下げ、ルース・ファロン特任講師がファシリテーター役を務め、24 人の高校生が参加した。

第2回 グローバル AP「エンパワメントセミナー」

平成 28 年 10 月 31 日、神奈川総合高校で第2回目のグローバル AP「エンパワメントセミナー」が行われ本学の関美和准教授がワークショップを進めた。第2回目は「難民と移民」の問題を取り上げ、参加した高校生 24 名と高校教員 2 名と共に議論を行った。

第3回 グローバル AP「エンパワメントセミナー」

平成 28 年 11 月 14 日に再び神奈川総合高校で第3回目のグローバル AP「エンパワメントセミナー」が開かれ、関美和准教授がファシリテーター役を務めた。第3回目のテーマは「オリンピック」であり、24 名の生徒と高校教員 2 名が参加し、活発な議論が交わされた。

効果・成果

神奈川総合高等学校との共催で行ったグローバル AP「エンパワメントセミナー」では、参加した高校生が「難民の受け入れ」や「オリンピック」など時事的なトピックについて活発な英語での議論を行う機会を得た。

IV-17. IELTS 対策講座と試験を高校生にも開放

実施日：平成29年1月28日～平成29年3月18日
場所：杏林大学井の頭キャンパス

目的

英語学習に意欲的な高校生に英語検定試験とその対策講座を開放することで、大学での学びに向けた語学力の確認を目的とする。また本講座は、高大接続の観点からIELTSの試験を受験希望する在校生と高校生に対し、IELTSを主宰する日本英語検定協会の講座対策プログラムを、民間から派遣された講師が大学の教室で講義を行うプログラムである。

内容・実績

平成29年1月28日に、IELTS対策講座の第1回目が井の頭キャンパスF棟404教室（PC室）で行われた。計50名の意欲的な在學生と高校生が参加し、授業に臨んだ。ネイティブの担当講師の英語の説明に、全員集中して真剣に取り組んだ。

講習は3月11日まで毎週土曜日に各2時間、計6回開かれ、3月18日のIELTS受検に向けて進められた。

効果・成果

対策講座の受講でアカデミックな英語力を向上させ、検定試験受検に至る学習意欲を継続できた。



IV-18. ルーブリックの改良と入学試験への導入準備

目的

平成 26 年度より開発が始まったルーブリックの目的は、学力の 3 要素のうち、試験でなく課外活動や種々の体験で評価されやすい主体性、協働性、多様性、課題発見・解決力および言語の 4 要素を図るためである。

内容・実績

平成 28 年度においては、これまでの改良版を作成し、平成 29 年度杏林大学 AO・推薦合格者約 120 名に対し回答してもらい、入試での適応を試みるための予備調査を行った。その結果を踏まえ、平成 30 年度入試での導入が決定した。以下、ルーブリックガイドを掲載する。

<p>杏林大学 ルーブリックガイド</p> <p>回答のしかた </p>	
チェック年月日	(西暦) 年 月 日
所属高等学校名	
氏名	

ルーブリック回答の流れ

以下の手順に従って回答していきましょう。

① ルーブリックを理解する



② 自分の高校時代を振り返り、力を入れた経験を思い出す



③ 自分の経験を評価シートの基準に合わせて自己評価 3つの経験について回答シートに記入



④ 言語能力について自己評価・回答シート記入



⑤ 経験・成果を裏付ける根拠資料を ポートフォリオに整理

2

ルーブリックってなに? ~ルーブリックを理解する~

ルーブリックとは、皆さんが今までの経験の中で身に付けた能力のレベル、学習の到達度を数値化したものです。

皆さんは、「学力の3要素」という言葉を聞いたことがありますか?

- 学力の3要素
- ① 十分な知識・技能
 - ② それらを基盤にして答えが一つに定まらない問題に自ら解を見いだしていく思考力・判断力・表現力などの能力
 - ③ これらの基になる主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度

知識・技能は、マークシート式の試験やテストでも測ることができますが、②の思考力・判断力・表現力は記述式でないとなかなか測ることができません。さらに、③の主体性・多様性・協働性は試験やテストでは測ることができません。

皆さん一人一人の進路に応じた多様な可能性を伸ばすためには、皆さんの幅広い資質・能力を多面的に評価し、育成していくため、学校内の活動での学習成果だけでなく、一人一人の目標や進路などに応じて自主的に行われる学習などについても、学びの成果として評価する必要があります。

杏林大学のルーブリックでは、多面的な能力として「主体性」「多様性」「協働性」「課題発見・解決力」と、英語や中国語など外国語の「語学力(話す・書く・読む)」の到達度がセルフチェックできるようになっています。



多面的な能力について	多面的な能力を測るための基となる経験に関しては、4つの領域があります(4ページルーブリックで取り扱う4つの領域についてを参照)。高校在学中に取り組んだ経験の中から3つを選択し、それぞれの経験について記入してください。なお、領域に関しては重複しても大丈夫です(例えば、A領域だけで3つ選ぶことも可能です)。
言語について	言語に関しては、2言語までチェックできるようになっています。それぞれの能力は、レベル1~5の5段階で数値化され、段階を踏んで難易度が上がっていきます。数値化するレベルには、その根拠や指標が「ルーブリック評価シート」(8~11ページ)に記載されています。それをよく読み、自身に当てはまるレベルを選択し、別紙回答シートに数値を記入してください(6ページ「回答シート記入上の注意点」を参照)。そのレベルとした根拠や理由も記入することができます。
根拠資料	上記2つの経験で出した成果(結果や、制作物など)を示す根拠資料に関しては、ポートフォリオに整理してください(7ページ「自己評価を裏付ける根拠資料について」を参照)。

なお、回答いただいた情報の個人情報、杏林大学が定める個人情報保護規程を遵守し取り扱います。

3

ルーブリックで取り扱う4つの領域

- ① 高校時代を振り返り、力を入れた経験を下記の4つの領域に照らし合わせます(語学は別です)。
 - ② A~Dの4つの領域に当てはまる経験3つを、「ルーブリック回答シート」に記入してください。
- *1つの領域で複数の経験でも、3つ別々の領域を選んで問題ありません。
*自分が選んだ経験がA~Dのどの領域に入るかを決める際には、下記の【例】を参考にしてください。

学外	
学校が指定しない自主的な経験	<p>A 学校行事としての強制力がなく、自発的に取り組んだ学外の経験</p> <p>【例】</p> <ul style="list-style-type: none"> ●授業以外の自主的な学習 ●大学の講義・セミナーの聴講 ●資格・検定試験の取得 ●留学・海外研修 ●地域活動 ●ボランティア ●習い事 ●コンテスト、発表会への参加 など
授業及び学校が行事として決めている経験	<p>C 予め学校の年間スケジュールに入っている全員が参加する学外行事</p> <p>【例】</p> <ul style="list-style-type: none"> ●オリエンテーションキャンプ ●海外研修 ●修学旅行 ●実習 ●施設見学 など

4

Point

選択する経験は、
学外の活動によるもの 学内の活動によるもの に分れます。

その次に
学校が指定しない自主的な経験 授業及び学校が行事として決めている経験
に分れますので、よく整理して選びましょう。



学内	
学校が指定しない自主的な経験	<p>B 学校行事としての強制力がなく、自発的に取り組んだ学内の経験</p> <p>【例】</p> <ul style="list-style-type: none"> ●「探究的な学習」課題研究 ●部活動 ●委員会活動(学級委員) ●生徒会 ●応援団員 など
授業及び学校が行事として決めている経験	<p>D 予め学校の年間スケジュールに入っている全員が参加する学内行事</p> <p>【例】</p> <ul style="list-style-type: none"> ●「総合的な学習の時間」 ●授業 ●授業以外の決められた学習 ●合唱コンクール ●体育祭 ●文化祭 ●球技大会 など

5

回答シート記入例と注意点

ルーブリック回答シート～多面的能力①～

経験のタイトル	野球部活動	経験の題名を自分で記入	カテゴリ	点数
領域	B	A～Dを記入	主体性	4
経験の期間	高校1年～3年生の夏まで	その経験を行った期間を記入	多様性	4
根拠資料	有	無	協働性	4
			課題発見・解決力	3
			合計スコア	15

経験の内容

1年生の時は先輩部員の練習環境を少しでも良くするために、気づかぬ学がしました。
また、用具の手入れなどは毎年の仕事だったので、物と大切にしたい生活習慣を身に付けました。
2年生の時は試合に出させてもらうことで、チームやレイの難しさや大切さを学びました。3年生の時はキャプテンに選ばれ、部員とのコミュニケーションの取れ方、リーダーシップについて学びました。また、目標であった県大会ベストは実現することができました。

Point
上の書でつけた各点数の合計を記入
※一部の経験では4つの多面的能力すべてに点数がつかない可能性があります
が、評価が不利になることはありません。

ルーブリック回答シート～言語①～

言語	英語	現在学んでいる言語を記入	カテゴリ	点数
検定・資格(点数)	英検2級	所持している検定や資格、点数を記入	話す【対話力】	3
根拠資料	有	無	話す【プレゼン力】	3
			聞く	4
			書く	4
			読む	4
			合計スコア	18

この言語に関する実践的な経験があれば記入してください

高校2年生の夏休みに1ヶ月間、アメリカのバークレイズ高校に短期留学しました。学校の授業で英語を活用したのはもちろん、アメリカ人の友人と英語で会話し、現地のアメリカ人家庭にホームステイをしたので、ホストファミリーと積極的に英語でコミュニケーションしました。

6

自己評価を裏付ける根拠資料について

選択した3つの経験の自己評価、言語能力を裏付ける根拠資料を、ポートフォリオの中に整理してください。資料は、できる限りA4サイズに拡大または縮小して現物のコピーを作成してください。写真に撮ったもの、新聞の切り抜きなどは、A4用紙に貼付して構いません。提出された資料は、原則として返却しませんので注意してください。

添付する根拠資料の例	
部活動などの場合	●大会名、試合名、出場記録、成績・順位がわかるもの(開催要項、スコアブック、大会結果、新聞・雑誌記事、賞状など)
総合的な学習 探究的な学習 課題研究などの場合	●論文・レポートや作文、ポスターなどの製作物 ●学習の記録や作品などを計画的に集積したポートフォリオ ●報告会やプレゼンテーションの様子を撮影した写真・ビデオや配布資料
海外研修などの場合	●新聞、レポート、パンフレット、ポスターなどの製作物 ●報告会やプレゼンテーションの様子を撮影した写真や配布資料 ●研修の参加・修了を証する証明書・修了証
委員会などの場合	●委員会名、任期、出席者本人の役職などがわかるもの ●新聞、ポスター、活動報告書などの製作物
地域活動や ボランティアの場合	●主催者の作る活動についての資料 ●仲間から書いてもらった評価 ●活動している写真など
習い事などの場合	●習い事の先生の氏名や教室の名前・場所 ●段位・級位などを示す賞状・証明書 ●コンクールの賞状、作品などの成果物
行事や研修などの場合	●行事や研修のおしりやパンフレットや写真など ●行事や研修について自分で作った報告書、感想文など
言語能力の場合	●各種の英語資格・検定試験(英検、GTEC CBT、IELTS、TEAP、TOEFL iBT、TOEIC/TOEIC S&W)の合格通知、合格証書、合格証明書、またはスコアレポート ●各種の中国語資格・検定試験(中国語検定試験、HSK)の合格通知、合格証書、または合格証明書 ●他の外国語の語学力を示す証明書

7

ルーブリック評価シート 多面的能力指標

主体性	1	指示されたことは、指導者・責任者の指導の下で期間までにやります。	●指導の下でやります
	2	指示されたことは、指導者・責任者がいなくても期間までに最低限やります。	●指導なしでもやります
	3	指示されたことが、特にやりたいことではなかったとしてもやるからには十分高い意欲を持ってやります。	●高い意欲でやります
	4	自分が意欲を高めて情報を取捨選択できる判断力を持ち、その判断に責任を持って率先して行動する。	●判断力 ●率先して行動
	5	自分が意欲を高めて情報を取捨選択できる判断力を持ち、その判断に責任を持って率先して行動する。また、その行動は第三者から見ても創意工夫があると評価される。	●判断力 ●率先して行動 ●創意工夫 ●模範として評価

多様性	1	自分の意図に関係なく、所属するクラスやチームのメンバーに誰がいるのかがわかる。考えの違う相手に対して、仮に感情的になっても、自分をコントロールすることができる。	●自己感情コントロール
	2	自分の意図に関係なく、所属するクラスやチームのメンバーに誰がいるのかがわかり、そのメンバーがどのような人物なのかを理解できる。しかし、理解はできるが相手を知るまでにはいかない。考えの違う相手に対して、仮に感情的になっても、反動的な言動を取らずに自分の考えを伝えることができる。	●自分の考えを伝える
	3	自分の意図に関係なく、所属するクラスやチームのメンバーがどのような価値観を持った人物なのかを理解できる。また相手を知るまでにはいかないが、相手に合った接し方がある。考えの違う相手に対して、感情的にならずに、自分の考えを冷静に伝えられる。	●相手に合わせられる ●感情にならない ●冷静に伝えられる
	4	自分の意図に関係なく、所属するクラスやチームのメンバーがどのような価値観を持った人物なのかを理解でき、相手の価値観を尊重し、相手を認めようとする。考えの違う相手に対して、相手の考えを根拠を聞き出すことで解釈の幅を広げることができる。その上で自分の考えを冷静に伝えられる。	●相手を尊重できる ●相手の考えを聞き出す ●理解の幅を広げられる ●冷静に伝えられる
	5	レベル4を前提に、自分が所属するクラスやチームのメンバー同士で対立意見が出た場合、目的を確認して意思決定ができ、かつ決定した考えと違う方向へ配慮することでメンバー同士のさらなる結果を回ることができる。考えの違う相手であっても、背景や根拠を自分が感じ取り、それを確認できる。その上で自分の考えを冷静に伝え、敬意を持って納得するまで生産性のある議論が続けられる。	●意思決定ができる ●結果を回ることができる ●相手の考えの根拠を感じ取れる ●冷静に伝えられる ●敬意を持って議論を続けられる

8

協働性	1	自分が所属するクラスやチームなどの目標を理解し、仲間に対しては波風を立てないような姿勢で取り組むことができる。	●目標を理解 ●波風を立てない姿勢
	2	自分が所属するクラスやチームなどの目標を理解し、仲間から与えられた役割を全うするように取り組むことができる。	●目標を理解 ●役割を全うする
	3	自分が所属するクラスやチームなどの目標に向かって、やるべきことを理解した上で積極的に協力できる。かつ、そのプロセスで、仲間を認め合いながら取り組むことができる。	●やるべきことを理解 ●積極的に協力 ●仲間を認め合い
	4	自分が所属するクラスやチームなどの目標に向かって、役割に責任を持って貢献できる。かつ、そのプロセスで、仲の良い悪いに関わらず価値観の違いを受け入れ目標に向かうことができる。	●責任を持って貢献 ●環境の異なる他者の価値観を受け入れられる
	5	自分が所属するクラスやチームなどの目標に向かって、役割に責任を持って貢献できる。かつ、そのプロセスで、様々な生活環境、年齢、国籍や文化で過ごしている他者の価値観を受け入れて目標に向かうことができる。	●責任を持って貢献 ●環境の異なる他者の価値観を受け入れられる

課題発見・解決力	1	課題をとらえることができる。うながされれば解決に向かう行動を取れる。	●課題をとらえる ●解決に向かう
	2	積極的に課題に立ち向かい、情熱を持って解決しようとする行動ができる。しかし、その課題を解決すれば新たな課題が生まれる傾向にある。	●課題に立ち向かう ●情熱を持って行動
	3	自ら起こっている現状を見極め、本質的な課題をとらえ問題解決ができる。しかし、その課題のとらえ方は、まだ不十分な場合もある。	●本質的な課題をとらえる ●問題解決ができる
	4	自ら起こっている現状を見極め、本質的な課題をとらえることができる。なぜその課題が出たのか、どうすれば解決できるのかを掘り下げることで、具体的な解決策を導き出し、解決する行動を起こせる。	●冷静な見極め ●本質的な課題をとらえる ●課題掘り下がり ●具体的な解決策
	5	自ら起こっている現状を冷静に見極め、本質的な課題をとらえることができる。なぜその課題が出たのか、どうすれば解決できるのかを掘り下げることで、具体的な解決策を導き出し、解決する行動を起こせる。かつ、この状況を的確にメンバーに伝え共有することで一人では出せない価値の創出ができる。	●冷静な見極め ●本質的な課題をとらえる ●課題掘り下がり ●具体的な解決策 ●メンバーと共有 ●新たな価値創出

9

ルーブリック評価シート 言語能力指標

	対話力	1	2	3	4	5	実用英語検定	
							中級	準中級
		ごく簡単な単語を用いて自分の気持ちなどを伝えられる。ただし、正しい文章にすることはできない。	●簡単な単語 ●気持ちを伝える	5級 レベル相当	準4級 レベル相当			
		相手にゆっくり話してもらい手助けを借りながらであれば、自分の気持ちを伝える程度の簡単なやりとりができる。	●気持ちを伝える ●簡単なやりとり	4～3級 レベル相当	4級 レベル相当			
		自分や家族のことなどの身近な話題であれば、単語や短い文章でゆっくりやりとりできる。	●身近な話題の短い文章でのやりとり	準2級 レベル相当	3級 レベル相当			
		その言語が話されている地域への旅行中に起こるようなことに対し、大体は適切に対処できる。興味があることや身近な話題であれば、会話に加われる。	●旅行中の対処 ●身近な話題の会話	2級 レベル相当	2級 レベル相当			
		ネイティブスピーカーが相手であっても、ある程度流暢かつ自然なコミュニケーションを図れる。なじみの深い話題であれば、自分の意見を交えながら、積極的に会話に加われる。	●ネイティブ相手に自然なコミュニケーション ●積極的な会話	準1級 レベル相当	準1級 レベル相当			
	プレゼンテーション能力	挨拶など一言程度であれば話ができる。	●挨拶レベル	5級 レベル相当	準4級 レベル相当			
		自己紹介など定型的内容であれば話ができる。	●自己紹介レベル	4～3級 レベル相当	4級 レベル相当			
		身近な話題について、短い文章で話ができる。	●身近な話題の簡単な説明	準2級 レベル相当	3級 レベル相当			
		自分の経験、夢、希望などの身近な話題について、ごく簡単な表現で文章をつなぎながら説明できる。自分の意見に対し簡単な表現で理由付けや補足説明を行える。	●文章をつないで説明 ●自分の意見を説明	2級 レベル相当	2級 レベル相当			
		自分が興味・関心のある話題であれば、明確かつ詳細に説明できる。意見の分かれる時事問題について、利点や欠点を挙げながら自分の見解を説明できる。	●明確・詳細に説明 ●見解を説明	準1級 レベル相当	準1級 レベル相当			

10

	聞く	1	2	3	4	5	実用英語検定	
							中級	準中級
		ゆっくりはっきりと発音されるごく簡単な単語程度であれば理解できる。	●簡単な単語を理解	5級 レベル相当	準4級 レベル相当			
		日常の挨拶など、習慣的に使う言葉はわかる。ゆっくり、はっきり発音されれば、短い文章は理解できる。	●習慣的表現を理解 ●短い文章を理解	4～3級 レベル相当	4級 レベル相当			
		自分や家族のことなど身近な話題に関する簡単な表現であれば理解できる。短い文章であれば、要点をとらえることができる。	●簡単な表現を理解 ●要点をとらえる	準2級 レベル相当	3級 レベル相当			
		日常生活の中で頻繁に耳にする簡単な言い回しであれば、要点を理解できる。興味がある話題であれば、ラジオやテレビ番組の要点を理解できる。ただし、比較的ゆっくり、明瞭に発音されるものに限る。	●要点を理解 ●ラジオ・テレビ番組を理解	2級 レベル相当	2級 レベル相当			
		なじみの深い分野であれば、スピーチや講義の大部分を理解し、複雑な話の筋道を把握できる。ニュース番組の大部分を聞き取ることができる。くせのない発音であれば映画のストーリーを大体理解できる。	●スピーチ・講義を理解 ●ニュース番組聞き取り ●映画を理解	準1級 レベル相当	準1級 レベル相当			
	書く	ごく簡単な単語程度なら書ける。	●簡単な単語を書く	5級 レベル相当	準4級 レベル相当			
		住所や挨拶などの慣用句、必要事項に挙げられる個人情報などの定型文であれば書ける。	●慣用句・定型文を書く	4～3級 レベル相当	4級 レベル相当			
		自分の気持ちや、単純で短い文章で書ける。	●自分の気持ちを書く	準2級 レベル相当	3級 レベル相当			
		興味のあることやなじみの深い話題であれば、単純なつながり合いの文章を書ける。事実や感想を手紙に書ける。	●つながり合いの文章 ●事実・感想を書く	2級 レベル相当	2級 レベル相当			
		興味のあることであれば、明確かつ詳細な文章を書ける。特定の立場に立ち、情報を投入したり根拠を示したりして書ける。事実の描写だけでなく、伝えたい点を強調しながら手紙を書ける。	●明確・詳細な文章 ●レポートを書く ●伝えたい点を強調	準1級 レベル相当	準1級 レベル相当			
	読む	ごく簡単な単語程度なら読んで理解できる。	●簡単な単語を読む	5級 レベル相当	準4級 レベル相当			
		挨拶などの慣用句や駅名などの定型文であれば読んで理解できる。	●慣用句・定型文を読む	4～3級 レベル相当	4級 レベル相当			
		単純で短い文章を理解できる。日常生活の中で頻繁に目にする広告やメニューなどの定型的な表現を読んで理解できる。	●短い文章を理解 ●定型的な表現を理解	準2級 レベル相当	3級 レベル相当			
		日常的な文章であれば読んで理解できる。個人的な手紙の内容や書き手の心情を理解できる。	●日常的な文章を理解 ●心情を理解	2級 レベル相当	2級 レベル相当			
		時事問題に関する記事やレポートを読み、書き手の意見を理解することができる。小説などを読んで理解できる。	●意見を理解 ●小説などを理解	準1級 レベル相当	準1級 レベル相当			

11

日 時：平成 28 年 11 月 2 日
主 催：順天高等学校
「グローバルウィーク」
講 演 者：外国語学部 上野景文特任教授
講演テーマ：西欧文明の神髄
（1）「西欧につき学ぶことは、なぜ有益か？」
（2）東洋と西欧との間に存在する文明的な非対称性
（3）明治以来 150 年間に亘って進められてきた「脱
亜入欧」の試みの達成度
参 加 者：高校生 31 名、高校教員 7 名

日 時：平成 28 年 11 月 2 日
主 催：順天高等学校
「グローバルウィーク」
講 演 者：総合政策学部 マルコム・フィールド教授
講演テーマ：“What do we mean, global ? ”
参 加 者：高校生 16 名、高校教職員 7 名、本学学生 2 名



IV-20. 聖徳学園高校生への医学部での「環境と健康について」の実習開催

日 時：平成 28 年 10 月 22 日
場 所：杏林大学三鷹キャンパス 基礎医学研究棟 4 階実習室
担当教員：杏林大学医学部 細胞生理学教室 寺尾安生教授 他
内 容：「バイタルサインを測ってみよう」と題した体験講義・実習
参 加 者：聖徳学園中学・高等学校の生徒 10 名、教員 2 名

目的

聖徳学園中学・高等学校からの要請を受け、本学医学部と連携し、高校生に対して大学の授業を体験させることで、意識向上や大学における具体的な学びについて考えさせることを目的とし、実習を行った。

内容・実績

平成 28 年 10 月 22 日、午後 2 時 30 分から 5 時 45 分まで、医学部細胞生理学教室教員（寺尾安生教授他）による「バイタルサインを測ってみよう」と題した体験講義・実習が三鷹キャンパス基礎医学研究棟 4 階実習室にて実施され、聖徳学園中学・高

等学校の生徒 10 名、教員 2 名が参加した。

まず本日の実習で測定するバイタルサインについて、脈拍・血圧・呼吸・体温・意識等を図り、患者の健康状態を素早くチェックするために用いる検査であると説明がなされた。その後、「心電図」と「呼吸、酸素飽和度、血圧」グループに分かれそれぞれ器具を用いて実習を行った。

効果・成果

本実習を通じて、大学での学びを高校生に体験させ理解させることができたと共に、本学と聖徳学園中学・高等学校との連携強化に繋がった。



IV-21. 順天高等学校生徒への保健学部でのDNA関連技術の演習開催

日 時：平成 29 年 2 月 4 日
場 所：杏林大学井の頭キャンパス 保健学部A棟第4実習室
担当教員：杏林大学保健学部臨床検査技術学科 相磯聡子教授
ダシヤカ・シーヴァスリウム講師
内 容：DNA 関連技術演習
参 加 者：順天高等学校の生徒 23 名、引率教員 1 名

目的

基礎的な大学での生物学実習を体験することで、TRI Program の概略を理解し、TRI Program の中で使用する機器に慣れ、またその中で使用する英単語に慣れること等を目的としている。

内容・実績

今回の演習は、順天高等学校と杏林大学との高大連携の一環として企画されたもので、昨年度に続いて3回目の開催となる。実習に来校したのは、順天高等学校S（サイエンス）クラスの1年生で、来年の7月にはTRI(オーストラリア生物医学研究機関)での海外研修に参加する予定になっている生徒である。生徒たちは実習室に到着するとまず実習用の白衣に着替え、生体検査学研究室の相磯聡子准教授から諸注意を受けた後、早速 TRI で行う実験の概要(予想)を受講し、医療英語学研究室のダシヤカ・シー

ヴァスリウム講師から基本用語の確認の講義を受けた。午後からは、マイクロピペットやマイクロ遠心機を用いた演習、各実験プロトコルの確認、専門用語(英語)の使い方、アガロースゲルへの試料の添加演習、電気泳動のデモ、英語による指示の聞き取り練習が行われ、生徒たちはいずれも真剣な表情で熱心に取り組んだ。

効果・成果

参加した生徒から「大変細かいところまで要求される実験で難しかったけれども、様々な器具に触れることができ、体験できてとても良かった」、「今日メディカルイングリッシュの専門用語を耳にし、もっと英語の勉強に力を注ぐ必要があると思った」などの感想を聞くことができ今回の演習を実施することにより高大の連携の活動により広がりが持てた。



IV-22. 聖徳学園中高生のいじめ防止活動に保健学部の亀崎教授が参加

日 時：平成 28 年 6 月～平成 29 年 3 月
 主 催：聖徳学園中学・高等学校「いじめ防止プログラム推進」
 担当教員：杏林大学総保健学部看護学科学学校看護学研究室 亀崎路子教授
 内 容：「いじめ防止プログラム推進」の一貫として活動を支援

目的

本活動は、聖徳学園中学・高等学校（武蔵野市）において、いじめ防止を目的に活動しようとしているピアサポーター（中学・高校生）と、その生徒達を支援しようと集まってきた大学生との共同プロジェクトである。

効果・成果

大学生は、中高生に「自分が人の役に立つことが出来る存在だと思ってもらいたい」というねらいを持って関わっていたが、中高生が成長した姿を誇らしげに眺めている様子が見られた。本活動は今後も引き続き行う予定である。

内容・実績

いじめ防止プログラム	月日	活動内容	参加者
①計画	6月17日	第1回ミーティング ：問題意識の共有・願いの表出	中高生5人 大学生6人
	8月5日	第2回ミーティング ：企画検討・実施計画	中高生5人 大学生5人
②準備	8月30日	文化祭に向けての準備	中高生5人
③共同プロジェクトの実施（アクション）	9月17日 ～18日	太子祭（文化祭）発表 いじめについてのアンケート実施	中高生7人 大学生5人
④近隣校とのいじめ防止サミット	11月5日	いじめサミットの開催 ピアサポ通信・ポスターの掲示	中高生10人 大学生1人
⑤振り返り	3月7日	振り返りミーティング	中高生5人 大学生10人

IV-23. 青梅総合高等学校生徒にインターンシップを提供

日 時：平成 28 年 8 月 18 日・8 月 19 日
場 所：杏林大学井の頭キャンパス
担 当：杏林大学キャリアサポートセンター
内 容：「職業・仕事、働くということ」について本学にてインターンシップを体験
参 加 者：都立青梅総合高校の生徒 2 名

目的

都立青梅総合高校の要請を受け、高校生に働くことに対する意識付けを目的とし本学にて職業体験を実施した。

内容・実績

平成 28 年 8 月 18 日・8 月 19 日の 2 日間、都立青梅総合高校の生徒 2 名が、杏林大学井の頭キャンパスでインターンシップを体験した。高校生はまず初日には地域交流課高大接続担当の職員から簡単なオリエンテーションを受けて、学生支援課で自転車置き場の整理、番号確認作業、パソコンへの入力等を職員の指導を受けながら作業を行い、昼休みに学食初体験をした後、午後からは図書館で書架の移動、カウンター業務を体験し、初日の予定を終了した。

2 日目は、キャリアサポートセンターで「大学の仕事について」再びガイダンスを受けた後、同センター内で入力作業の指導を受け実践し、職員に随行して掲示を貼り替える作業を行った。午後からは、入学センターで翌日から開催されるオープンキャンパスの準備の手伝いとして、事務所内での袋詰め作業や、校内に各学部の幟を立てる作業などを体験しインターンシップは終了した。

効果・成果

生徒たちからは、「大学の事務職の仕事が始めはどのようなものか想像がつかなかったが、いろいろな業務があることが少し理解できて良かった」、「学生の個人情報なども預かっており、非常に責任のある仕事だと思った」などの感想が聞かれ、高校生の働くことに対する意識が強く感じられた。



IV-24. 三鷹中等教育学校生徒が職場見学

日 時：平成 28 年 11 月 15 日
場 所：杏林大学井の頭キャンパス
担 当：杏林大学キャリアサポートセンター、情報教育センター、
地域交流課（高大接続推進担当）
内 容：「職業・仕事、働くということ」について本学にてインターンシップを体験
参 加 者：三鷹中等教育学校生徒（中学 1 年生）10 名

目的

三鷹中等教育学校より要請を受け、「働くことの大切さを学ぶとともに、自分の進路に関心を持ち、目的意識を高め、望ましい職業観・勤労観を身につけて日常生活の向上に資する」、「地域の大人とふれあうことにより、社会の一員として社会性を身に付ける機会とする」ことを目的とし本学での職場見学を実施した。

内容・実績

平成 28 年 11 月 15 日、都立三鷹中等教育学校前

期課程 1 年（中学 1 年生）10 名が井の頭キャンパスを訪れ、職場見学を行った。地域交流課（高大接続推進担当）にて職員からオリエンテーションを受けた後、キャリアサポートセンター、図書館、情報センターを巡った。各施設では施設担当職員から直接業務内容や施設等の説明を受けながら最後に PBL 教室に移動し、見学後の振り返りを行った。

効果・成果

職場見学を通じて高校生は働くことに対して意識を強め、本見学会の目的を果たしたといえる。



IV-25. 三鷹中等教育学校生徒が職場体験

日 時：平成 28 年 11 月 16 日・11 月 17 日・11 月 18 日
場 所：杏林大学井の頭キャンパス
担 当：杏林大学学生支援課、井の頭図書館、キャリアサポートセンター、
地域交流課（高大接続推進担当）
内 容：「職業・仕事、働くということ」について本学にてインターンシップを体験
参 加 者：三鷹中等教育学校生徒（中学 2 年生）3 名

目的

三鷹中等教育学校より要請を受け、「働くことの大切さを学ぶとともに、自分の進路に関心を持ち、目的意識を高め、望ましい職業観・勤労観を身につけて日常生活の向上に資する」、「地域の大人とふれあうことにより、社会の一員として社会性を身に付ける機会とする」ことを目的とし本学にて職場体験を実施した。

内容・実績

生徒は初日に地域交流課（高大接続推進担当）の

職員から簡単なオリエンテーションを受けた後、学生支援課、井の頭図書館、キャリアサポートセンターの 3 部署を一日 2 部署ずつ勤務するというローテーションで、3 日間それぞれの仕事を体験した。

効果・成果

生徒たちから、「始めは大学の事務というものが想像もつかなかったが、学生生活をする上で事務は欠かせない存在だというのが理解できた」、「同じ作業を継続するのは忍耐が必要だが、大学事務には必要不可欠な部分だと思った」などの感想を聞くことができ今回の就業に対する意識が強まったことが感じられた。



IV-26. 武蔵村山高等学校生徒が戴帽式を見学

日 時：平成 28 年 11 月 26 日
場 所：杏林大学三鷹キャンパス松田記念館
内 容：医学部付属看護専門学校第 41 回戴帽式
参 加 者：都立武蔵村山高校の生徒 4 名、引率教員 2 名

目的

武蔵村山高等学校が本学の招きを受け、医学部付属看護専門学校の第 41 回戴帽式の見学を行った。

内容・実績

戴帽式は、現代の看護のありかたの礎を築いたイギリスのフローレンス・ナイチンゲールの献身と姿勢に敬意をあらわし、看護の象徴である帽子を頂く

という厳かな儀式を通してその意思を受け継ぐというもので、戴帽生だけではなく、出席した者にも看護者への尊敬を抱かせてくれる大変感動的な式となった。

効果・成果

武蔵村山高校の生徒たちからは、「戴帽生代表の看護への決意表明に感動した」「私もあの場に立ちたいです」といった感想が聞かれた。



IV-27. マスコミ取材

目的・内容・実績

①公益社団法人私立大学情報教育協会の機関誌である『大学教育と情報』2016年度 No.2(通巻155号)に「杏林大学のグローバル人材育成教育と高大接続の取り組み」のタイトルで杏林大学外国語学部北村一真准教授の記事が4ページの誌面にて紹介された。

②2017年3月17日発行の『大学教育再生加速プログラム(AP)テーマⅢ 中間レポート2017』に「大学生に対して行ってきたグローバル人材育成事業を

高校生に積極的に開放」のタイトルで杏林大学の活動を掲載した。

③平成29年3月23日、J:COM 武蔵野三鷹の「デイリーニュース」番組にて、本学が3月21日に桜美林大学と締結した「アドバンスト・プレイズメント単位互換協定」の締結式での様子が放映された。

④平成29年3月23日、毎日新聞 web の「@大学」ページにて桜美林大学と締結した「アドバンスト・プレイズメント単位互換協定」の締結式での様子が掲載された。

大学の組織的な取り組みの工夫

杏林大学のグローバル人材育成教育と高大接続の取り組み

杏林大学 外国語学部准教授 北村 一真

1. はじめに
杏林大学では平成24年度に外国語学部を中心とした教育実践の方針が評価され、文部科学省の「グローバル人材育成推進事業」(現、経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援)に採択されました。これを一つの契機として、変化する社会の中で国際的にリーダーシップを発揮することのできる人材の育成にとりわけ注力してきました。本稿では全学的なグローバル人材教育の方針と取り組み、また、その一環として「大学教育再生加速プログラム」(AP)に採択された「日英中トライリンガル育成のための高大接続」の特色と現状について紹介します。

2. 杏林大学のグローバル人材教育の方針と取り組み
本学のグローバル人材教育では、責任ある仕事を遂行できる「卓越した語学力」の育成、自他の文化と教養に精通し、文化的慣習をわきまえ、対等に交渉することで創造的な結論を導き出せる「スマートでタフな交渉能力」の涵養、さらに、これら2つの能力を実践的経験の中で強化するための「海外留学・研修の機会」の拡大を3本の柱として、数々の具体的な取り組みを行ってきました。

語学面では資格試験による目標値を定めた上で、外国語会話の実践が常時行える「英語サロン」「中国語サロン」の設置やeラーニングの導入などを通じ、学生の能力強化につとめています。交渉力の面ではアクティブ・ラーニング教室を新たに設置し、「ケーススタディ演習」と呼ばれる双方

3. 高大接続教育導入の目的
以上、全学的なグローバル教育の方針と取り組みを簡単に紹介しましたが、本稿ではその中で高大接続教育がどのような役割、機能を持つのかについて説明します。

本学では、平成22年度から実施された第2次中期計画において高大連携推進実行部会を作り高等中学校との連携を深め、杏林大学の持つ教育・研究資源を高等中学校に開放し、スプリングセミナー、インターンシップなどで高等中学校と連携を深めてきました。これらには有益な成果を生んできましたが、同時に、大学生と高校生が相互に学び合う場

大学の組織的な取り組みの工夫

を一度きりのイベントとして共有するだけでなく、継続的に体験すること、また、高校生が日常的に学習していることやその成果を大学入学後の教育にスムーズに連携させることの重要性について再認識する機会となりました。とりわけ、本学のグローバル人材育成においては、英語+1としての中国語の修得も重視し、また、高度な語学能力・交渉能力に加え、その能力を実践的に磨く機会として留学経験を一つの要点に位置づけているという立場から、どうしても長期的スパンに立った学修計画を継続的なシステムのもとで構築することが理想となります。高校での学習と大学での学修を一貫した取り組みの中に位置づけることで、高大のスムーズな移行や留学機会の増大、早期留学の実現など、より柔軟性に富んだ人材育成を行うことが本学のグローバル人材における高大接続導入のねらいです。

4. 「日英中トライリンガル育成のための高大接続」の特色
本学の高大接続の特色は、グローバル人材の育成に主眼を置き、同様の目的を共有する高等中学校との連携を重視している点、また、英語と中国語の2言語に関して卓抜した語学力を獲得し、日英中のトライリンガル人材を育成することを目指している点にあります。このプログラムの要となるのが、「杏林APラウンドテーブル」、Advanced Placement、「ルーブリック」による成果測定法の高大連携です。以下これらの概要を説明します(図1)。

まずは、連携を行う関係教育機関と現状や要望等について積極的な情報交換を行う場が不可欠になります。このため、平成26年度のAP事業開始時より、本学では年度に複数回、「杏林APラウンドテーブル」という場を設け、スーパーグローバルハイスクール(SGH)校やグローバル人材育成を目指す高等中学校の代表者を招き、様々な教育上の連携の可能性や課題について協議を行ってきました。このような意見交換を定期的を実施することで、後述する本事業の各種取り組みについても的確な助言やフィードバックを得ることが可能となっています。

そして、長期的視座に立った教育の実現の要となるのが、Advanced Placementというシステムです。本システムは米国で長年にわたって採用実績のあるもので、高校生が大学の講義に出席することと単位を取得でき、それを進学先の大学の卒業単位として活用できるという制度です。これを実現できれば、高校卒業時にすでに高い能力を獲得している学生は、1年次留学期も含め、より自由

【概要】日英中トライリンガル育成のための高大接続は、現在、外国語学部を中心に全学的に展開している「グローバル人材育成推進事業」の一環として、本学が「社会教育の推進と連携」を掲げ、留学・研修・国際化・国際化への推進と連携の観点から、日英中トライリンガル育成のための高大接続を推進しています。

【目的】本学が「グローバル人材育成」を推進する中で、海外留学・研修・国際化・国際化への推進と連携の観点から、日英中トライリンガル育成のための高大接続を推進しています。

【特色】本学が「グローバル人材育成」を推進する中で、海外留学・研修・国際化・国際化への推進と連携の観点から、日英中トライリンガル育成のための高大接続を推進しています。

【実施内容】本学が「グローバル人材育成」を推進する中で、海外留学・研修・国際化・国際化への推進と連携の観点から、日英中トライリンガル育成のための高大接続を推進しています。

【実施スケジュール】

年度	26年度	27年度	28年度
杏林APラウンドテーブル	2回実施	6回実施	6回実施
Willingness Center 日英中トライリンガル育成のための高大接続	3人参加	10人参加	30人参加
研修機会(大学主催)	0人参加	210人参加	300人参加

図1 「日英中トライリンガル育成のための高大接続」の概要

IV-28. 平成27年度事業報告書の作成と配布

目的

事業報告書の作成・印刷・送付を行うことによって、事業の成果を広く公表することを目的とする。

内容・実績

平成28年5月から6月にかけて、平成27年度分の事業報告書を作成し、特設サイトで公開するとともに本学外国語学部、総合政策学部の全専任教員、医学部・保健学部の全教授に1部ずつ配布した。また、愛知県から北海道までのSGH校及びSGHアシエイトの高等学校約100校に送付した。

効果・成果

昨年に引き続き広く杏林大学のAP事業の取組みを大学の内外に周知することで、学内では医学部・保健学部・総合政策学部の教員による高校生への特別指導や高等学校訪問の出張講義などがより頻繁に行われるようになり、大学生や高校生にとって他分野での協働学習が可能となると同時に、他大学からの本事業に関する教職員の訪問を受けるなど、杏林大学の本事業の取組みの学外での認知度も大いに向上することとなった。



〈波及効果〉

本事業は外国語学部を中心とする取組であるが、高大接続・高大連携を全学的に波及させることも目標の一つである。杏林大学では、大学教育全般に関して全学的な第3次中期計画実行委員会を設けているが、その中の「大学の機能強化」項目の中に「高大連携実行部会」がある。本事業が採択される以前から、高大連携実行部会を中心に全学的に高大連携を進めてきたが、今後は本事業の高大接続と中期計画との有機的連動を進めることが必要とされる。その結果として高校側は、高校のみではできない学習指導を杏林大学のリソースの協力を得て行え、また杏林大学も高校側の多様な課外教育の実態に認識を深め、本事業での活動が全学的な波及効果へと繋がり、高大接続・高大連携による協力が緊密となった。

IV-13. 高等学校での講演

日 時：平成27年5月9日
主 催：順天高等学校
講 演 者：外国語学部 坂本ロビン学部長
講演テーマ：「国際人とは何か」
内 容：Lesson. 1 Always say "Yes!"
Lesson. 2 Try going to a foreign country!!
Lesson. 3 Don't be shy!!
参 加 者：順天高等学校 2年生 200名

日 時：平成27年8月21日
主 催：聖徳学園高等学校
コーディネーター：杏林大学外国語学部 代兼美幸
講演テーマ：「日本型グローバルリーダーシップ」
内 容：聖徳学園高等学校主催により、順天高等学校 (SGH) も参加しテーマに沿ってディスカッションを行った。



＜学内会議開催日程一覧＞

IV-29. 杏林AP推進委員会(第10回～第15回)

平成28年度 第10回 杏林AP推進委員会

日 時：平成28年5月9日（月） 11：00～12：00
場 所：杏林大学井の頭キャンパス C棟5階 大会議室

平成28年度 第11回 杏林AP推進委員会

日 時：平成28年7月11日（月） 11：00～12：00
場 所：杏林大学井の頭キャンパス C棟5階 大会議室

平成28年度 第12回 杏林AP推進委員会

日 時：平成28年9月26日（月） 13：00～14：00
場 所：杏林大学井の頭キャンパス C棟5階 大会議室

平成28年度 第13回 杏林AP推進委員会

日 時：平成28年11月14日（月） 11：00～12：00
場 所：杏林大学井の頭キャンパス D棟4階 会議室

**平成28年度
第14回 杏林AP推進委員会**

日 時：平成29年1月30日（月） 13：30～14：30
場 所：杏林大学井の頭キャンパス C棟5階 大会議室

**平成28年度
第15回 杏林AP推進委員会**

日 時：平成29年3月13日（月） 16：45～18：00
場 所：杏林大学井の頭キャンパス C棟5階 大会議室

IV-30. 高大接続推進委員会(第18回～第26回)

平成28年度 第18回 高大接続推進委員会

日 時：平成28年4月13日(水) 16:20～18:10
場 所：杏林大学井の頭キャンパス C棟5階 大会議室

平成28年度 第19回 高大接続推進委員会

日 時：平成28年5月11日(水) 16:20～18:10
場 所：杏林大学井の頭キャンパス C棟5階 大会議室

平成28年度 第20回 高大接続推進委員会 第1回 中期計画高大接続推進室

日 時：平成28年6月1日(水) 16:20～18:10
場 所：杏林大学井の頭キャンパス C棟5階 大会議室

★今回より中期計画の高大接続推進室の会議と同時開催する。

平成28年度 第21回 高大接続推進委員会

日 時：平成28年7月6日(水) 16:20～18:10
場 所：杏林大学井の頭キャンパス C棟5階 大会議室

**平成 28 年度
第 22 回 高大接続推進委員会**

日 時：平成 28 年 8 月 3 日（水） 16：20～18：10
場 所：杏林大学井の頭キャンパス C 棟 5 階 大会議室

**平成 28 年度
第 23 回 高大接続推進委員会
第 2 回 中期計画高大接続推進室**

日 時：平成 28 年 9 月 7 日（水） 16：20～18：10
場 所：杏林大学井の頭キャンパス C 棟 5 階 大会議室

**平成 28 年度
第 24 回 高大接続推進委員会**

日 時：平成 28 年 11 月 2 日（水） 16：20～18：10
場 所：杏林大学井の頭キャンパス C 棟 5 階 大会議室

**平成 28 年度
第 25 回 高大接続推進委員会**

日 時：平成 28 年 12 月 7 日（水） 16：20～18：10
場 所：杏林大学井の頭キャンパス C 棟 5 階 大会議室

平成 28 年度
第 26 回 高大接続推進委員会

日	時	平成 29 年 1 月 11 日 (水) 16 : 20 ~ 18 : 10
場	所	杏林大学井の頭キャンパス C 棟 5 階 大会議室

V. 事業の評価：平成27年度事業を対象に

V. 事業の評価

日 時：平成28年9月24日 14:00～
場 所：三鷹キャンパス本部棟11階の貴賓室
評価委員：中学・高等学校校長（高校教育全般）
 大学教授（英語関係）
 高校教諭（中国語関係）
杏 林：跡見裕学長、ポール・スノードン副学長、
 坂本ロビン外国語学部長、稲垣大輔高大接続推進室長、
 黒田幸司大学事務部長、青柳貴徳井の頭事務部副部長、
 晝間太郎地域交流課課次長（高大接続推進担当）

目的

「大学教育再生加速プログラム（AP）推進委員会」にて平成27年度の事業について自己点検を行い、第三者評価委員会による点検・評価を受審し、平成28年度以降の改善計画の検討を始めることを目的とする。

内容・実績

平成28年9月24日、杏林大学三鷹キャンパスにて3人の外部評価委員として、中学・高等学校の校長（高校教育全般）、大学教授（英語関係）、高校教諭（中国語関係）を招いて大学教育再生加速プログラム（AP）テーマⅢ（高大接続）の第三者評価委員会を開催した。委員会ではまず高大接続推進室長より本AP補助事業の、杏林APラウンドテーブル、日英中トライリンガルキャンプ、ルーブリック、アドバンストプレイスメント等について概略説明を行った後に評価委員より事前に準備された第三者評価書に基づき、補足説明等が行われた。

高大接続に関連する各種教育イベント、ライティングセンターの活動等に関して、高校生にとって貴重な機会の提供であると同時に、ピアチューターとして参加した大学生の主体性も養うとして肯定的な評価がなされた。また、杏林APラウンドテーブルや「高校と大学をつなぐFD/SD」等についても、高等学校と杏林大学の双方向的な意見交流が深まっている証左として評価された。これらの評価は本事業が行ってきた各種取組の妥当性を確認するとともに、それらをさらに積極的に進めていくための契機となった。

また各種教育イベントに関し、英語や英語圏の学生との交流に偏りがあるという指摘を受け、その内容を検討吟味した結果、3月に実施した「日英中トライリンガルキャンプ」では中国語圏からの留学生との協働学修を導入し、中国語を学修する時間も一部取り入れた。そして、外国語ができることが将来の職業や生き方にどのように繋がるのか、「将来のビジョン」を描ける講演や卒業生の話などを行うことが重要であるとの指摘を受け、卒業生、OB・OGまでをも含めたイベントの検討を開始した。



第三者評価委員会の評価報告書は下記のとおりである。

大学教育再生加速プログラム テーマⅢ（高大接続）
平成 27 年度事業
杏林大学「日英中トライリンガル育成のための高大接続」
第三者評価報告書

【第三者評価委員会開催】

日時： 平成 28 年 9 月 24 日（土）14：00～15：40

場所： 杏林大学 三鷹キャンパス 本部棟 11 階 貴賓室

評価委員： 委員長 平方邦行氏（工学院大学附属中学校・高等学校 校長）

委員 鈴木 栄氏（湘南工科大学 教授）

委員 藤井達也氏（埼玉県立伊奈学園総合高等学校 教諭）

杏林大学参加者： 跡見 裕学長、ポール・スノードン副学長、坂本ロビン外国語学部長、
稲垣大輔高大接続推進室長、黒田幸司部長、
青柳貴徳副部長、晝間大郎課次長

各評価委員の第三者評価書と評価委員会での追加の指摘等をもとに、以下に評価の概要を記す。
個別の評価については、添付の第三者評価書を参照されたい。

【評価の概要】

平成 27 年度の事業は、前年度からの学内基盤構築・関連施設設置、新たな人員配置等の基盤が整備され、計画に沿い各事業項目が順調に進展した点は評価できる。

文部科学省も高校教育の改革・入試改革・大学教育の改革の三位一体の高大接続改革を進めている最中であり、杏林大学の全学的グローバル教育推進の中に位置づけられた高大接続事業であるが、高校と大学の教育の接続が、高校側と大学側の意見交換をもとに、いろいろなイベントを通して高校生や大学生に還元され実施されており、高大接続に寄与している。

中国との関係は政治的には芳しくないが、言語が国際関係に大きな影響を与えることは歴史の中に現れている。こうした中、日英中トライリンガルの育成は経済的側面のみならず、平和構築にも寄与する教育目標であると思われる。

ライティングセンターや日英中トライリンガルキャンプでのピアチューターの活動は、大学生にも主体的に多様な人と活動する機会を与えている。大学側が IELTS 対策講座や前述の教育機会を高校側に提供することは、高校としては非常にありがたいであろう。さらに、AP ラウンドテーブルや高校教員と大学教職員の参加する FD/SD 等も含め、高等学校と杏林大学の相互方向の交流・意見交換が拡大し深まりを見せている点は評価できる。

ただ、活動が英語系に偏っている感があるので、ライティングセンターでの中国語の指導なども試みられると良い。英語圏の学生との交流機会はあるが、中国の提携大学や留学生との連携企画も期待したい。そして各種の教育イベントにおいて、参加した高校生や大学生が自らの学習成果を残すレポート等を作ることが大切である。これはポートフォリオの作成にもつながる。同様にルーブリックによる自己評価を高校生や大学生が行うことで改善が進み、より高度なプログラムへの発展が期待できる。

また、外国語ができることが将来の職業や生き方にどのように繋がるのか、「将来のビジョン」を描ける講演や卒業生の話などを行うことで、生徒や学生がロールモデルを持つことができよう。

アドバンストプレイズメントの会議も開かれ、今後は期待できる。

言語能力のルーブリックのレベルが CEFR 基準の B2 レベルで終わっているようなので、グローバル人材を目指す教育であるならば C1 レベルを目指すことも必要かもしれない。言葉は思考力と結びつくので、クリティカルシンキング、クリエイティブシンキングの育成がグローバル人材としては重要である。アジアの大学の中には英語のみで卒業できる大学もあり、留学生が日本を選ぶかどうかは、今後の日本の大学全体の問題でもある。

【評価のまとめ】

平成 27 年度事業は前年度に比べ広がりや深まりを見せており、他大学および高校の 3 つのポリシーデザインに対しロールモデルとなることが期待できる。AP ラウンドテーブルは高校関係者、大学関係者にとって改革への一つの大きなリソースとなりえると感じる。今後、一層の高みを目指すことが期待される。

【添付資料】

第三者評価書 3 通

- ・平方邦行委員長
- ・鈴木 栄委員
- ・藤井達也委員

【評価のための根拠資料】

- ・平成 27 年度大学改革推進等補助金（大学改革推進事業）調書
- ・日英中トライリンガル育成のための高大接続 事業報告書 平成 27 年度
- ・平成 28 年度大学教育再生戦略推進費 大学教育再生加速プログラム（AP）
「高大接続改革推進事業」計画調書

以上

VI. 事業推進組織 委員一覧

平成 28 年度 杏林 AP 推進委員会 委員一覧

跡見 裕	学 長
ポール・スノードン	副学長
渡邊 卓	医学部長
大滝純一	保健学部長
大川昌利	総合政策学部長
坂本ロビン	外国語学部長
稲垣大輔	高大接続推進室長（外国語学部教授）
ルース・ファロン	特任講師
蒔田耕平	事務局長
吹野俊郎	広報・企画調査室長
黒田幸司	大学事務部長
内藤俊郎	井の頭事務部長
森 芳久	井の頭事務部副部長
青柳貴徳	井の頭事務部副部長
晝間大郎	地域交流課（高大接続推進担当）課次長（事務局）

平成 28 年度 高大接続推進委員会 委員一覧

稲垣大輔	高大接続推進室長・外国語学部
進邦徹夫	総合政策学部
栗崎 健	医学部
石井博之	保健学部
東 克巳	保健学部
岡村 裕	総合政策学部
高田京子	総合政策学部
北村一真	外国語学部
藤田由香利	外国語学部
ルース・ファロン	特任講師
黒田幸司	大学事務部
内藤俊郎	井の頭事務部
浅野 稔	医学部事務部
森 芳久	井の頭事務部
青柳貴徳	井の頭事務部 高大接続担当（事務局）
晝間大郎	高大接続担当（事務局）
栗原恵子	高大接続担当（事務局）

文部科学省「大学教育再生加速プログラム テーマⅢ(高大接続)」平成26年度採択
日英中トライリンガル育成のための高大接続

平成28年度 事業報告書

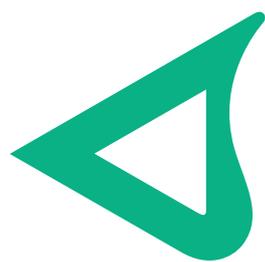
発行日 平成29年7月

編集発行 杏林大学 高大接続推進室

〒181-8612 東京都三鷹市下連雀5-4-1

TEL 0422-47-8000 FAX 0422-47-8056

<http://www.kyorin-u.ac.jp/univ/trilingual/>



KYORIN

